

42491

教科書文庫

4
810
44-1933
200030 2097

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

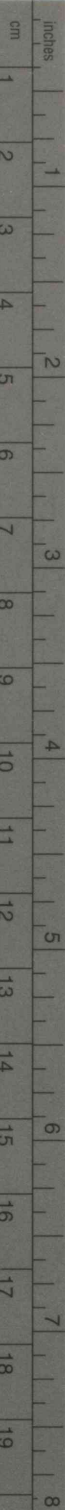


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

3759
Fu10
資料室

帝國新國文 卷三



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 JAPAN

文部省檢定
昭和八年八月十四日 實業學校國語科

室 翠 資

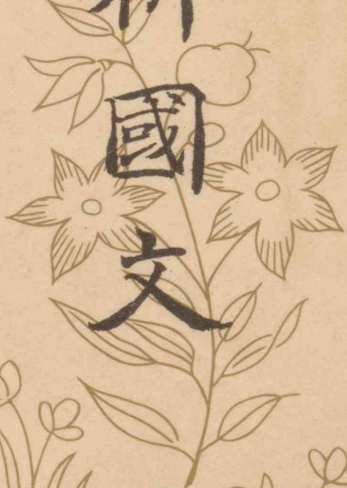
375.9
Fu10

東京帝國大學教授
文學博士 藤村作編

帝國



新國文



卷三

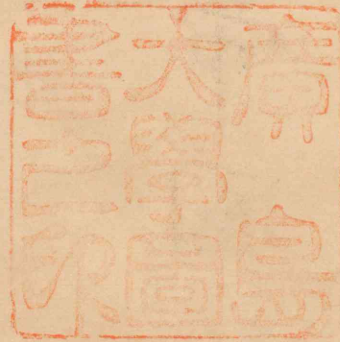
株式會社
帝國書院



(第一課參照)

(筆友鶴司庄)

島 宮



帝國新國文 卷三

目次

八一	伊東忠太	日本の風光	八一
八二	増田義一	仕事を樂しめ	八二
八三	川二題	川二題	八三
八四	一 川	一 川	八四
八五	二 小川	二 小川	八五
八六	金言三則	金言三則	八六
八七	一 眞面目であれ	一 眞面目であれ	八七
八八	二 静かに健實に	二 静かに健實に	八八
八九	三 成功は困難に打勝つにあり	三 成功は困難に打勝つにあり	八九
九〇	五 釣錢	五 釣錢	九〇

目次

一

第一期本試

- 六 祖國を思ふ心
- 七 爆彈三烈士
- 八 蟲出づる頃
- 九 大根賣の話
- 一〇 時計
- 一一 開墾小屋
- 一二 不斷の努力
- 一三 鬼作左
- 一四 雨の趣味
- 一五 國立公園
- 一六 眞夏
- 一七 旅順戰蹟秘話
- 一八 少年傳令使

- 佐々木指月 三三
- 小笠原長生 四一
- 横山桐郎 五一
- 柴田鳩翁 五九
- 薄田泣菫 六六
- 白鳥省吾 七一
- 八波則吉 七四
- 新井白石 七九
- 黒田鵬心 八四
- 青木芳雄 八九
- 北原白秋 九五
- 上田恭輔 九七
- 櫻井忠温 一〇四

- 一九 まむしと百足の闘ひ
- 二〇 藤樹先生
- 二一 城明け渡しの日
- 二二 諫言
- 二三 科學と空想
- 二四 秋風の音
- 二五 ますほの小貝

- 橋南谿 一二一
- 大佛次郎 一二九
- 湯淺常山 一三七
- 若山牧水 一四〇
- 岩田九郎 一五五

目次終



伊東忠太
米澤市の人
建築學者
工學博士
東京帝國大學名
譽教授

一 日本の風光

伊東忠太

日本は風光明媚クワイビな國であるといふことは、我々國民のお國自慢ばかりでなく、また外國觀光客の外交的辭令ばかりでもない。

日本の如く風景に富む國は、實際世界にあまり多くない。たゞその規模の小さいのは、地理・地質によるもので、遺憾としなければならぬ。

何時からいはれた事か知らぬが、安藝の宮島、丹後の天の橋立、陸前の松島を日本三景と稱する。併しこの三つが果して日本最美の風景であらうか。

勿論風景の美をはかる尺度はなく、見る人の主観次第で批判されるのであるから、どこの景色が絶対に最優であるとは定め難いが、この三景以上の景色は決して少くないと思ふ。

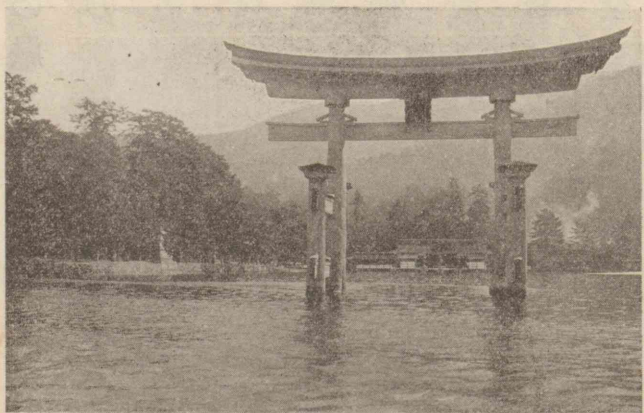
この三景の選抜は恐らく日本本州を中央・西部・東部の三区に分けて、各區に一ヶ所づゝ特色のある景を選んだものであらう。即ち近畿地方で天の橋立、中國で宮島、東國で松島を選んだのであらう。或は又海洋の方面から見、日本海で橋立、瀬戸内海で宮島、太平洋で松島を選んだものであるかも知れない。畢竟三景は地方代表的のものである。

予の観る所では、日本三景の中で、安藝の宮島が第一であ

浦々 杉野浦・腰細浦・
青海苔浦・山白
浦・洲屋浦・御
床浦・網浦
嚴島神社
官幣中社
推古天皇の御代
に始めて造營せ
られた
祭神は市杵島姫
命・田心姫命・湍
津姫命。相殿に
天照大神・國常
立尊・素盞鳴尊
を祀る
彌山
嚴島神社後方の
山

る。廻れば七里の浦々の中で、嚴島神社と彌山を海上から眺めたところが壓巻である。併し瀬戸内海には、單に山と水との關係から見れば、その規模・布置・色調等に於て、宮島にまさるとも劣らぬ所は決して少くない。ただ神社をその間に點じて風景を引締めた點に於て、恐らく宮島に及ぶものはなからう。

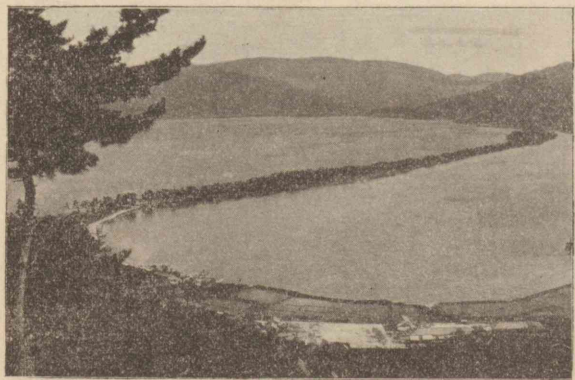
日本海の沿岸は概ね平板で奇巧なる風景は少い。この間に於いては、橋立はその選に入



嚴島

智恩寺
吉津村大字文珠
の海濱(切戸)に
在る
切戸の文珠とも
いふ

るべき資格は十分あらう。
橋立の智恩寺に於けるは宮島の嚴島神社に於けるが如
き重大の意味はないが、なほ丹後の
國道に當り、橋立の行路を扼し、橋立
と併存して離るべからざる關係に
ある。即ち自然の風景に人工の美
を點ずるものと解することが出來
る。



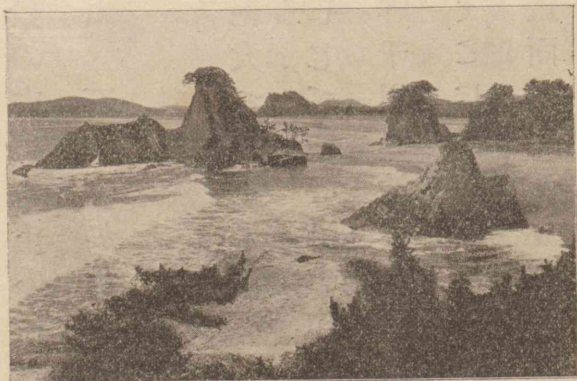
天の橋立

富山
瑞巖寺の東北に
ある

松島の景色は海と島とを取混ぜ
て平面的な景色である。松島の全
景は富山の頂から展望しなければ分らぬ。景色がやゝ散

瑞巖寺
淳和天皇の御代
圓仁の創立
今は臨濟宗で青
龍山と號する
松島村に在る

漫で中心がなく、従つてその印象は淺く弱く、宮島ほどの深
さと強さはないと思ふ。松島の景
色に點ぜられた人工の景物は瑞巖
寺である。寺は松島によつて名高
く、松島は寺によつて名高い。日本
三景は何れも海を取り入れた景色
であつて、三者各、その趣を異にする
とはいへ、畢竟同一種類である。



松島

若し自然の構圖が極めて巧妙に
出來てゐたら、これに人文的素因を點ずるに及ばず、また點
ずる餘地もない。しかし普通の場合には、やはり何等かの

近江八景
比良の暮雪・矢
走の歸帆・石山
の秋月・瀬田の
夕照・三井の晩
鐘・堅田の落雁・
栗津の晴嵐・唐
崎の夜雨

人文的要素の點出によつて風景が引締められるものであ
る。尤もそれが餘りに多ければ、却つて風景を俗化させ、ま
たは庭園化させる。例へば近江八景の中に、石山の秋月を
數へてゐるが、月だけでは景にならぬ。石山寺がその人文
的素因となつて始めて美しい。

絶大なる自然の構圖でも、餘りに絶大では風景にならぬ
場合がある。この時、人文的素因を投じて中心點を作れば
始めて風景になり得る。例へば、一眸千里の沙漠は、風景と
しては寧ろ索漠たるものであるが、そこにはるかに一群の
駱駝の列が點出されるとき、好個の畫面となる。若し駱駝
の鈴の音が風につれて斷續して聞えるならば、更に幽情を

深からしめるであらう。又例へば萬仞の峻嶺が雲を破つ
て峙つ姿は實に雄壯である。しかしこの山岳に伴ふ何等



雲仙岳 (新日本八景の内) (富田溪仙筆)

かの神祕的傳説を想ふとき、
非情の土石も、有情の靈山と
して觀客を魅するのである。
この場合は、無形の精神的、人
文的素因が加はつたのであ
る。

る。近江八景には小細工を弄した點もあるが、とにかく味
舊日本三景はこの點から
見て意味の深長なものがあ

新日本八景
華嚴瀧・十和田湖・雲仙岳・上高地・溪谷・別府温泉・狩勝峠・木曾川・室戸岬



増田義一
新潟縣の人
衆議院議員

ふべき所がある。新日本八景には、美しいものもあれば、物足らぬものもある。今後大いに考慮を費して、完璧な日本百景を選びたいものである。

—木片集—

二 仕事を樂しめ

増田義一

寡慾にして清貧に甘んずることの出来る人は、恐らく氣樂であらうが、多數の人は富を得んことを望んでゐる様である。何人も敢へて富を嫌はぬけれども、只果して富を得らるゝかどうか。その職業と境遇によつては、生活の安定さへ出来、子女の教育を施し得れば足れりと思ふ人もある。併しそれでも富を得らるゝものとすれば、之を望まざるものはなからう。

富は自ら造るのであるから、何か仕事を爲し、自ら働いてその収入の内より生活費を控除し、剩餘を蓄積するのに始まる事は言ふ迄もない。故にその仕事は何より大切と思はねばならぬ。仕事を嫌つて収入のみを得んと欲しても、到底達成されない。仕事を樂しめば、自ら勉強もし努力もする。勤勉にして能く奮闘すれば、俸給生活者は漸次昇進し、獨立自營は着々發展する筈である。東西古今を通じて巨富を造つた人は、皆自己の業務を樂しんだ人である。始めより富を造るに汲々したのでなく、その従事する業務が面白いために銳意努力し、その結果利益が増進し、自然に富

が出来たと云ふのが普通である。事業を樂しんだ結果富が蓄積されるのだから、二重の愉快とも云ふべきであらう。米國の小賣商王と云はれた大實業家ワナメーカー氏は、商賣するのは面白いのである。それを苦痛に感じたり、又



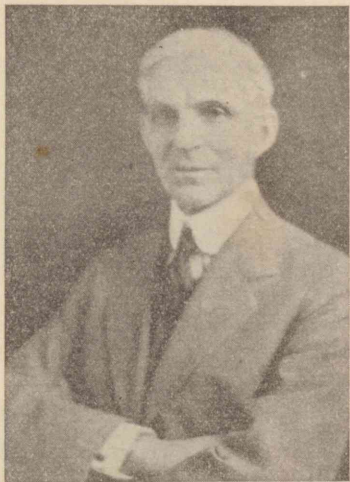
ワナメーカー

は金儲け一方に考へたりするのは間違ひだと言つたが、氏は全く最初から自己の商業を非常に樂しんだ人である。而して客にも仕事にも親切で、且つ努力する事が好きで、青年時代から勤勉が一種の習慣となつてゐた。それで氏は常に仕事さへすれば少

し位の苦痛は驅逐してしまふ。その快味は到底怠惰の人の知り得ない所であると語つてゐる。富を造らんと欲する者は、先づ自己の仕事を樂しむことから出發すべきだ。働かずに富を造つた人は古來未だ曾つて無い様だ。多くの致富者は皆勤勉努力した人のみである。努力する人は多く發展し、怠惰なるものは失敗するのが普通である。努力する人は精神を籠めて働くから智慧も出れば分別も出る。自ら改良進歩も湧いて来る。自然に収入も増加する譯だ。

既往及び現在の富豪を調べて見ると、揃ひも揃うて努力家である。それは我日本も歐米諸國も皆同一である。米

國の自動車王ヘンリーフォード氏の如きは、勤勞第一主義の權化とも云ふべき人だが、氏曰く「人間がなすべき自然の事を勤勞すべきこと、そして繁榮と幸福とは正直なる勤勉



ヘンリーフォード

を通じてのみ得られるものである。人類の災禍は主としてこの自然の行路を脱出せんと企てることから發生する。私はこの自然的主義を極度まで採用せよと云ふの外には、何等の勸告すべき言葉を知らない。我々は勤勞せねばならぬと私は取りきめてゐる。と。これフォード氏が體驗上より得たる致富の第一義であら

う。

元來人間を作るものは幸運でなくして勤勞である。米國の一記者は曰く、幸運は、常に顯はれ來るものを期待するけれども勤勞は、機敏な眼力と堅固なる意志とを以て、常に事務を創造する。幸運は寢床にあつて急使が遺産の通知を持ち來たすのを待つてゐる。けれども勤勞は、朝六時に寢床を離れて、ペン若くは槌を以つて忙しく合格の基礎を作らうと努める。幸運は悲鳴を洩らし、勤勞は歡聲を揚げる。幸運は機會に依頼し、勞働は品性に信賴する。幸運は物事に失敗して放恣に流れる。勤勞は向上闊歩してその抱負を蹉跎して有する。と。右は能く實際を穿つた適切な言であ

る。

米國の富豪カーネギー翁は、漫りに勞力を避けるものは無用の長物である。と叫んだが、富を造る人は怠惰を仇敵の如く思つてゐる。併し人間は休養も大切だし、娛樂も必要だから、決して極端に勤勞のみで世を渡れと言ふのではない。只勤勞第一であることだけは確かである。――運命の打開――

三 川二題

一 川

川、川

清い川



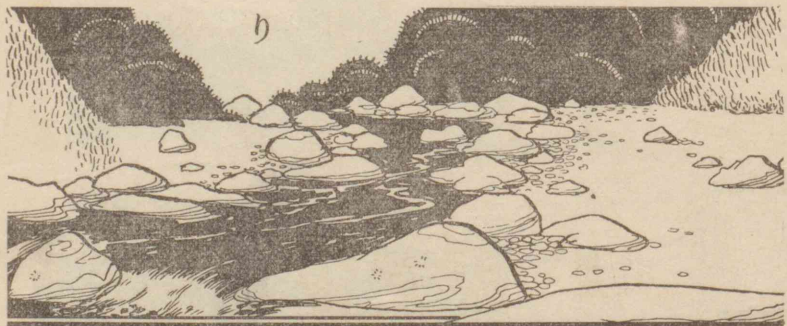
千家元麿

東京市の人
詩人

千家元麿



おまへは波立ち、
樂しげに走つてゆく。
笛のやうに歌ひながら、
曲つたり、眞直になつたり
少しも休まず
流れてゆく清い水よ。
お、樂しげに軽らかに、
みんなて跳上つて障害物を越えたり
輪を卷いて踊つたり、
急に輪をほどいて走り出したり
狂ふやうに楽しく興奮して



先へ先へと笛を吹いて走つてゆく
美しい水の精よ。
純潔に、平静に、
軽らかに、屈託もなく
楽しい旅をしてゆく川よ、
走れ、走れ
足並揃へて。

二 小川

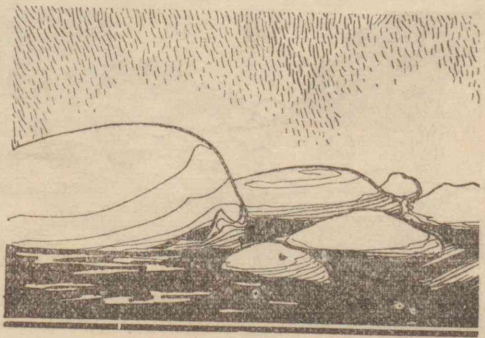
廣きそらをも浮べつゝ、
浮ぶ雲をもうつしつゝ、



三重縣の人

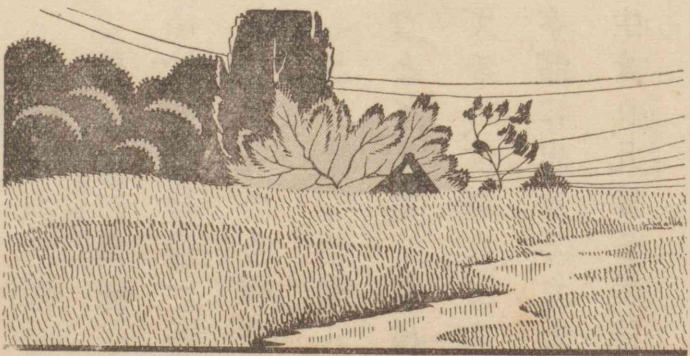
文學博士

歌人



佐々木信綱

さびしき村の片すみを
名もなき小川流れ行く。
流れはいとも細けれど、
道のまに〜逆はず、
親しき波の打ちつれて
語らひながら歩みゆく。
すみれ花咲く春ごとに、
紅葉いろどる秋ごとに、
影みる子らは變れども、
變らぬ流靜かなり。





島根縣の人
政治家
男爵
貴族院議員

四 金言三則

一 眞面目であれ

若槻禮次郎

我輩の終始一貫奉ずる所の處世信條は、眞面目の一字に盡きる。されば、世の青年諸子に求められて答へる言葉は「眞面目であれ」の一語である。
「眞面目」とは、自己の本體に忠實であることである。眞は、まことであり、僞假贋に對し、面目は、かほであり、すがたであり、自己の本體である。眞實なる自己の本體に忠なることが眞面目である。此處に正しき道義は生まれ、凡ゆる美德は根柢を持つて初めて光彩を放つ。

今日社會人心の腐敗は、多くこの眞面目を忘れたことにあると思ふ。僞善の横行、策謀たをまがひの闊歩、神經過敏に眼前の小慾に奔命をつからすのは、自己の本體を忘れたものの浮足的行爲である。眞に眞面目に徹した人生には、生きるものものの大きい欣びがある。自己の本體に則して行動する時、自己を僞らざることの自負は、生活の歩みに大きい餘裕となつて、初めて正々堂々の心境は生まれる。

今日、汝心に訊ひて恥づるものなきや。の間に對して、眞にイエスと答へ得る者幾人かある。正々堂々天地に向つて恥ぢざる氣概は遙かに去つて、小心翼翼、遲疑逡巡ちぎやすんすんたる世相この時に當り、眞に我輩の切望するものは、眞面目であれ」の

一語である。

自己を偽りなせる者の才智は、結局小才である。小才は遂に小才の上に出るものではない。小才の横行より以上に世を害するの甚だしきものなきを思ふ時、正しく世に處さんと思ふ者のとるべき道は、眞實の自己を眞向に翳ざし、正々堂々自己の信ずるものに邁進することである。眞面目に徹するものの生活は、常に疑懼なく、逡巡なく、生氣に充ちて大空の如く朗かである。信ずるものに邁進しつゝ倒るゝも、亦男子の面目ならずや。論語に曰く、朝ニ道ヲ聞キ夕ニ死ストモ可ナリと。この境地は、たゞ眞面目を奉じて生きるもののみの味はひ得べき郷土である。

論語
孔子及びその弟子達の言行を記した書物

今日の世相混濁敢て一言世の若き諸子に向つて、眞面目であれの一語を呈す。

二 静かに、健實に

鳩山一郎

小山司法大臣は弓術の達人である。小山君の話聴くと弓術の極意は先づ弓は静かに引くべし。矢が弦を離れる瞬間は、稻露の形といつて、稻の穂から露が落ちる時の様に自然で、静かに、または熟柿がへたを離れて落ちる時のやうでなければならぬ。的に中てようとあせつて、強く矢を離さうと野心を起したりすると、却つてへろへろ矢になつて的を外れるさうである。下手な人が球をうんと飛

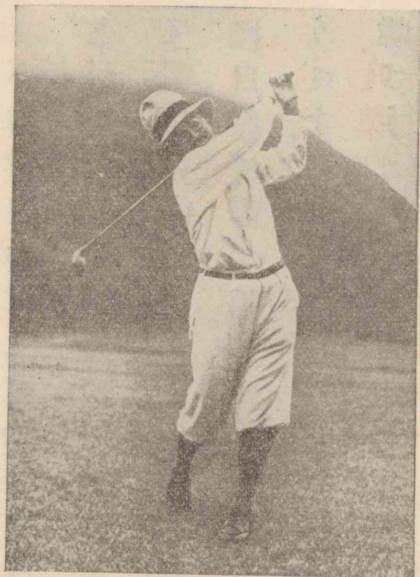


一郎

東京の人
政治家
現文部大臣
小山司法大臣
名は松吉
東京府の人
現司法大臣。

クラブ
ゴルフ用の打棒

スイング
振ること



クラクを振る者

遠く飛ばさうとするには、
静かな正しいスイングが
必要だ。これがうまく行
かなかつたらきつと成績
が悪い。

弓でもゴルフでも、その
極意をのみこむには相當の時間練習が要るのは勿論であ
る。いくら性のいゝ人でも、一日や二日で極意に到達する
ものではない。一歩々々漸進的に踏みしめて行かねばな

スロー、エンド、
ステッデイ
静かに健實に

らぬ。この一歩々々たゆまず努力して行く所に武術でも
スポーツでも、人間をよくする理由があると思ふ。スロー、
エンド、ステッデイである。株屋さんの様に、一躍して成金に
なつたり、一朝にして夜逃げをしたりする氣持では、スポー
ツの上達は期し得られない。

今日は非常時である。非常時内閣が出来る程の時勢で
ある。この行詰つた世相、憂鬱な社會、これは勿論**国正**しな
ければならない。その手段として、ある者は一朝一夕にし
て飛躍的改革が出来るといひ、ある者は、一歩々々踏みしめ
て、改善して行くが、いゝといふ。

僕は、株屋さんのやり口を危険至極と思ふ。一歩々々修

練して彼岸に達せんとするスポーツマンの行き方が適正と考へる。

静かに、そして、健實に――。

三 成功は困難に打勝つにあり 武藤山治

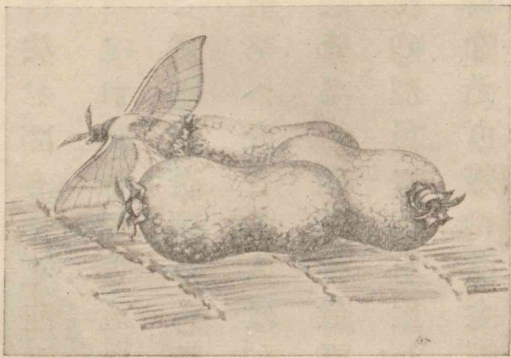
妨げることは助けることの正反對であるやうに見えるが、事の實際に當りては必ずしもさうでない。多くの場合に於て、妨害とか障碍とかいふ困難なことが、吾々にとつて最善の助力となることが多い。

嘗てある人が、「帝王蝶」の研究をして居たところが、ある日のこと、繭の中で孵化した蝶が、繭を喰ひ破つて一所懸命に脱け出ようとともがいて居るのを注視して居た。細かい絲



武藤山治
岐阜縣の人
政治家
實業家

が、幾萬と相錯交して、分厚い繭の壁を組立て、ゝゝるのであるから、繭の中の蝶は、之を喰ひ破つて外へ出るために、非常



の骨折をして居るのである。蝶は苦闘のあまり疲れ切つてしまつて、假令出ても、その羽翼は傷み力は絶えてしまふであらうと思はれる、痛痛しい有様が目に入つた。

そこでこの人は、蝶をたすけてやらうと思ひ、手ばやく繭を切り裂いて自由の世界へ出る道をひらいてやつた。然るに蝶は出て來るには出て來たが、まつたく氣抜けの態度で飛びもせず籠

の廻りをよろしく這つて居るばかりであつた。羽翼の色も鮮麗とならず、少しも飛揚する模様もなく、活氣は次第に失せ、間もなく死んでしまつたのである。

これは一體どういふ譯でこんな風になつたのであらう。この蝶を苦闘から救ふには、その苦しみを除去するにあると考へたこの人は、却つて蝶に苦痛を與へる害を造つたのである。造物主は蝶を造るに當つて、その色は美しく輝きその羽翼に力を生むべく、その新生の當初に際してこの障碍を造り蝶の試金石とした。

蝶の造物主は又吾々人間の造物主である。彼は人間にも、その心の羽翼に力あれと色々な難關を吾等に與へてゐ

る。吾々がこの人生の間に活動して行く爲には、強い精神と之を支持する活動力がなければならぬ。この精神と活動力は恰度繭の中にある蝶の如く、難關に屈せず之を切り抜けて行くところに涵養されるのである。難關そのものを、吾々から取除いてしまふことは、吾々を助けるものでなくて害するものである。勿論困難に當つて吾々はお互に慰め合ひ、助け合はねばならぬが、自ら困難と闘つて、之に打勝つ精神を養ふことは最も必要である。吾々は困難に際會する毎に、痛せず 機 ま ず 之 を 突 破 す る 強 い 精 神 を 持 た ね ば な ら ぬ。

—中央公論—

米山梅吉
静岡縣の人
實業家

五 鈞 錢

米 山 梅 吉

よく考へて見ると、我々日本人の經濟思想の缺陷は、日常生活の上にも遺憾なく現れてゐる。我々は日常生活に於て浪費を省き、實用を重んずることに心がけねばならないが、先づ以て各人が小拂ひなどに際して、鈞錢を確實に受取ることなどから出發せねばならぬ。

「士は錢を愛せず」といふ如き考は、今日では最早時代錯誤で、鈞錢の日常極めて疎漏に取扱はれてゐるのは注意すべき缺點であると思ふ。

會て某ステーション内の賣店の前を過ぎて、偶、一人の客が夕刊新聞一枚を求めて、二錢の銅貨を投じ、店員が「お釣りを」と、言ふにも拘らず「要らぬ」と答へて去るを見受けた事がある。このやうな事は隨處に見られることであらう。一錢の代價に對して二錢を支拂ふのは、一圓に對して二圓、十圓に對して廿圓を交付するのと同様で物品に對して倍額の代金を負擔するのである。たとへかういふ事は少額の場合に行はれてゐるとしても、經濟の法則に於て少額なれば可、多額なれば不可と言ひ得べき筈はない。小を集めて大に及ぼすの眞理は、すべての場合を支配する。「塵も積れば山となる」とは、古來からの金科玉條である。非あつちのちまき鈞錢に對しては感覺を鋭敏にし、是非ともこれを受取ら

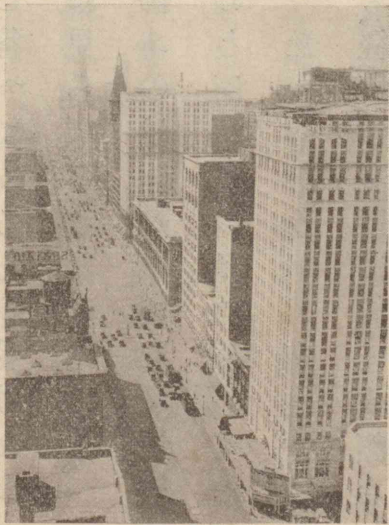
シカゴ

ミシガン州に
ある アメリカ
合衆國第二の大
都市

五十仙
一仙は約二錢

ねばならぬばかりでなく、更にこれを勘定し、間違ひなきこ
とを検査することを怠つてはならない。これを粗略にす
る弊は、我々が通貨を異にし、風習を同じくせざる外國に旅
行する時に於て、著しく感ずることとて、時々苦い忘れ難い經
験を嘗めることがある。

私は往年シカゴに於て、と
ある藥店で齒磨一箇を購ひ、
これに對して五十仙セントの代金
を支拂ふに當つて、小錢の持
合せがあつたに拘らず、大紙
幣を出して釣銭を求め、然もこれを調べずにポケットに投



市ゴカシ

じ、外に出でようとした時、店員より呼び止められ、彼の思ひ
違ひで代金として二十五仙を差引いた勘定で「釣銭」を渡し
たから、餘分を返戻してくれといはれたのに、頗る不愉快を
感じたが、これを質すと、表示器は明かに二十五仙の收入を
現して居つて、店員の要求の根據あることを證明してゐた。
これは如何にも自己の不注意を現したものと悟つて、慚愧
に堪へなかつた。

最も忘れ難いことはウォシントンにをつた或日、招かれ
て故ブライアン翁のホテルに朝食を共にした時のことと
ある。兩人好むところの品を選んで注文し、やがてその品
品が程よくテーブルの上に配置されて、ボーイの將に一揖

ウォシントン
アメリカ合衆國
の首都
ブライアン翁
アメリカ合衆國
の政治家

して去らうとする時、翁はこれを追つて戸口に至り、低聲で釣錢を有つてゐるか否かと尋ねた上で、或貨幣を出してその中の或額をチップとして與へ、釣錢を受取られた所を目撃して、今更ながら驚嘆したことがあつた。翁は固より清貧の士で、毫も金錢を惜しむがためにかくしたのではなく、經濟觀念の自然の發露である。所謂成金者流でなければ、假令富裕の人でも浪費を省き實用を重んずるのは、米國人の自らなる習慣性である。釣錢は勿論、割前勘定の場合もすこぶる嚴重である。これは我々日本人の學ぶべく、心すべきことである。

日常生活に於ける少額の受拂にも、市場の大取引にも釣

錢は伴ふ。國家經濟についていへば、貿易の出超には釣錢があり、財政上で云へば歳計の剩餘はこれ又國民納税の釣錢といふべきものである。決して粗末にすべきものではない。

—經濟隨想—

六 祖國を思ふ心

佐々木指月

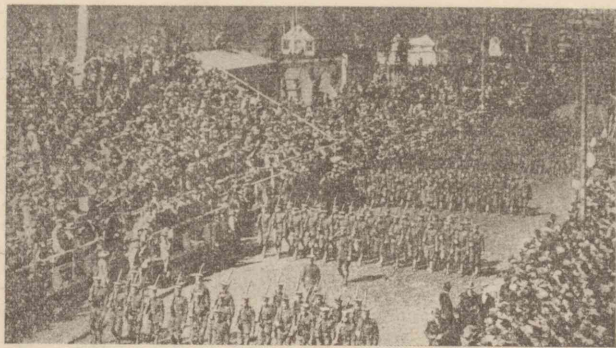
佐々木指月
彫刻家
文學者

一千九百十八年九月、世界大戦争の眞最中、私は北米合衆國の人口登録を紐育で受けた。私は紐育のユニオン角園の登録所へ行つた。當時米國は第二國民軍の動員ををへて、第三國民軍の召集をしようといふ前であつたから、街路は星條旗の虹を靡かせて行進する軍隊の喇叭の音が、高い

建物に反響し、市民はもう熱狂してしまつてゐた。青年と

いへば悉く軍隊の制服を纏ひ、纏はな
いものは老人と婦人と子供と外國人
だけといふほどであつた。

ユニオン角園の登録所で、私の名が
合衆國の帳簿の上に登録されて、やが
て送附さるべき地方兵事課の召集状
を待つ身になつて、私は星條旗に對し
て熱心に敬意を表するものとなつた。
一週間ばかり経つと、地方兵事課から

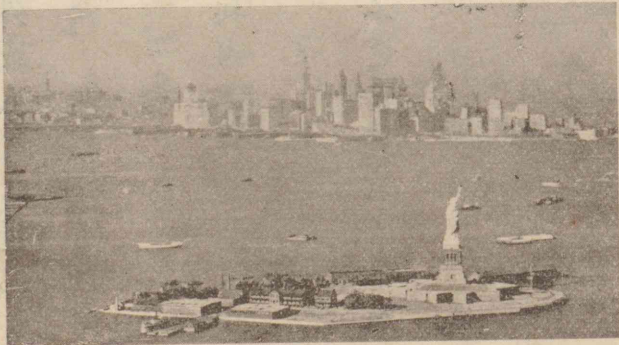


(時當戰大界世)軍米の中進行内市

呼出狀が來た。出頭したのは丁度夕方であつた。

館内の廣いホールには星條旗を掲げられ、自由の女神コ
ロンビアの繪箋は壁に貼られて、その
上から電球が幾つか灯の葩を開いて
ゐた。呼出された人々は、はや詰めか
けてゐた。黒人もゐれば、猶太人もゐ
た。妻を同伴した英語を解せぬ人も
ゐた。

私たちは女事務員から下調べを受
けて、公式の宣誓場に呼び入れられる
のを待つてゐた。獨身の市民は一も
二もなく軍籍に入れられた。妻子があつても、財産のある



像神女の由自るて立に口入の港クーヨーユニ

人や、また収入のある妻を持つた人は同じく軍籍に入れられた。まだ市民になつてゐなかつた外國人でも、進んで召集に應ずる宣誓をなしたのもあつた。群集はこれに對して敬意を表した。

私の順番は廻つて來た。私は公式兵事委員の前に立つた。

「先づあなたは虚言を言はないといふことを、右の手を舉げてお誓ひなさい。」

私は右の手を舉げた。

「あなたは合衆國の市民ですか。」
「否。」

「あなたは合衆國の市民となる希望を持つてゐますか。」
私の心の中には、或疑問が閃いた。幾人の日本人がこの問に對して「然り」と答へ得るであらうか。日本人には合衆國の市民權を與へないことになつてゐる。併し、その市民權を得ようとする希望を持つてゐるか。問はれた時に、その希望をだに心に持つてゐないと答へれば、それはつまりこの國に同化することを拒むものであらねばならぬ。太平洋沿岸でもこの同じ問を發してゐるであらう。それについて我が同胞は何と答へてゐるであらう。私は暫く黙然としてコロンビアの繪姿を眺めてゐた。

この國の市民になるには、その人の本國とこの國と一旦

戦端を開く曉には、その本國に對して銃を把るといふことを誓はねばならぬ。私にそれが誓へようか。いや私はこの國の市民となることを本心から望んでゐるだらうか。



1 タスボの兵募
書教の領統大ソルイウはるせに手

女神コロンビアの畫像は私が不知不識に抱いてゐた二重愛國心を憐むやうに見えた。

委員は緘黙を守つて、私

の答を待つてゐた。

「否。」

と私は答へた。すると更に問うた。

「あなたは合衆國の軍隊に加はつて合衆國の敵と戦ふ意志を持つてゐませんか。」

私には答をするのが苦しかつた。私はこの國に十三年來住んでゐて、その間この國に養はれて來た。然るに、今の國が多く犠牲を拂つて戦争をしてゐる秋トキに當つて、この國の爲に戦ふといふ誓を拒まなければならぬのを悲しんだ。若し一度意を決して合衆國の軍隊に加はつて大西洋を渡るならば、私は自分が生まれた國土を愛するといふ狭いけれども深い愛國心を捨てなければならぬ。私はそれをば善いことと考へ得るけれども、私の肉體はまだ故國の土に屬し、私の靈魂はなほ祖先のそれに屬するもので

あることを考へなければならぬ。私は、

「否。」

と答へた。

「それでは、あなたはあなたの本國に歸つて、あなたの本國の敵と戦ひますか。」

何といふ用心深い質問であらう。何といふ意味の廣汎な質問であらう。今私等の敵と見なしてゐるものは獨逸及びその聯合國であるが、若し他日、日本がこの國と砲火の間に見ゆる日が來たとしたら、私等は本國に歸つて、この國と戦ふかといふ質問になつて來る。この國の市民になるの希望もない、この國の軍隊に加はるのも望まない、しかし、

この國との戦には勇んで出るといふ誓を、今私は立てねばならぬ。私はこの時、私等はこの國から排斥されてもしかたがないと思つた。そして、

「然り。」

と答へた。

かうして、私はすごくと宣誓場を離れた。下を向いて人々の中を通つて歩廊に出た。

—中央公論—

七 爆彈三烈士

小笠原長生

敵前、二十メートルまで進出した決死の一隊は、敵の猛射をあびて、その前進をはばまれると共に、時は一秒々と迫



小笠原長生
海軍中將
子爵

馬田軍曹
工兵軍曹馬田豊
喜

つて行つた。遂に、

「強行破壊！」

の命は下り、馬田軍曹の率ゐる第一班は、突撃して鐵條網破壊を敢行せんとしたが、無念や全員殆ど斃れて、その目的を達することが出来ず、全滅の悲運に遭遇した。

眼のあたりに、親愛なる戦友が、憎むべき敵弾のため、相次いで悲壯なる戦死を遂げ、或は傷き斃れるのを見て、豫備にあつた第二班の勇士たちは、燃え上る悲憤の念に、思はず^{ナカ}眦^ミを裂いて敵陣を睨んだ。

勝ち誇つた敵軍は、なほも猛烈に、機關銃や小銃を亂射して、その危険と凄惨の度は、いよゝゝ加はるばかりである。

今や鐵條網破壊のために瞬時でも壕を出て進出したならば、再び生還を期し得ないのは勿論、鐵條網



長伍兵工江作



長伍兵工川北



長伍兵工下江

三烈士
作江工兵伍長
北川工兵伍長
江下工兵伍長

まで到達する事さへ不可能とされるに至つた。

しかも、歩兵部隊の突撃開始の時期は、時刻々に切迫してゐる。

やがては、下るべき突撃破壊の命を前に、三烈士たちは、いかにして、この猛射のなかを衝いて、破壊作業を達成することができ

るか、考へずには居られなかつた。
死は易い、されど任を果すのは重いのである。

徒らに死んだのでは、不忠になる！

「今に見ろ、今度こそ、完全に破壊して見せるぞ。」

烈士たちは、心の内で叫んだ。

けれども、この場合、その目的の達成は、殆ど不可能とさへ思はれるほど、險惡極まる状況であつた。

「おい、かう敵の射撃が猛烈では、とても、鐵條網へも行きつけないぞ。」

「さうだ。そしてたとへ行きつめたとしても、破壊筒を差込んでから點火などしてはをられんぞ。」

「なに構ふものか、火をつけてからその破壊筒を持つて突撃するのだ。そして鐵條網に投げ込まう。」

烈士たちの間には、期せずして、かうした、最後の決心が定められてゐた。

この方法こそ、工兵として最後の非常手段で、身を捨て、目的を貫徹せんとする、壯絶凄絶の破壊方法であつた。

但し、この方法は、必ずしも萬死の策ではない。點火した破壊筒を、懸命に鐵條網に叩きつけて、さつと身をひいて後退して來るので、この作業は平常から訓練されてゐる事であつた。

然し三烈士は、それ丈では、充分に破壊の目的が達しられないかどうかについて、不安があつた。

「投げつけただけでは、安心ができないぞ。」

「よしつ。それなら抱いたまゝ、鐵條網のなかへ飛び込めば大丈夫だらう。」

「さうだ破壊筒と一緒に、俺たちも爆發させれば間違ひなし。」

「よし、きつとうまくいくぞ。」

三烈士は、じつと手を握りあつて必死の約束を取交した。まことにこの場合、爆彈とともに三人が飛び込まねば、絶對に歩兵突撃路は開かれないのだ。何と云ふ健氣な覺悟であらう。自分の肉體を爆裂させて、鐵條網を破壊しようとするのである。これぞ即ち必ず死ぬが、必ず成功するといふ悲壯極まる決心なのだ、鬼神も泣かう！

時は來た、重大任務の時が來た。

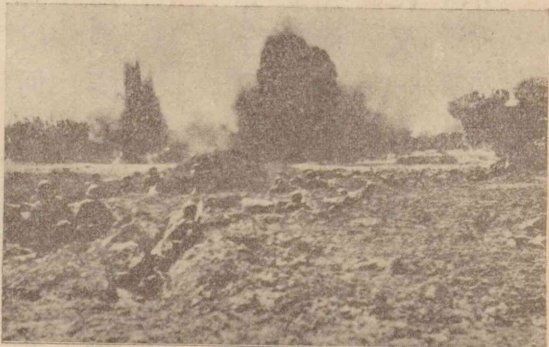
「最後の組だつ。」

東島隊長の悲痛を叫び。

「それつ。」

とばかり、この期を待ちに待つた三烈士は欣然として、直ぐに突撃破壊の準備にかゝつた。

生死を超越した三烈士は晴れやかに歡聲さへ上げつゝ、四メートルの青竹で作つた破壊筒に、次の命令を待つまでもなく、すでに火は點ぜられた。「前へつ。」



戦擬模たれさ催で地現後戦停

東島隊長
工兵少尉東島時
松

の號令一下。堰を破る奔流の如く、三烈士は、先頭北川、江下、作江の順序で、點火された破壊筒を引つ擔ぐと、弦を離れた矢の如く、無二無三に飛び出した。

身も心も一つになつた三烈士の肉彈は、何の躊躇ちゆうちゆうもあらばこそ、戦友の死骸を飛び越え、踏み越え、鐵條網めがけて奮進した。

この際、一個の破壊筒を三人で持つて行つたのは、その目方が重いためといふことよりも、よしや途中で一人が斃れても残りの二人で踏み込み得べく、更に又一人が斃れても最後の一人で鐵條網へ投げ込むことができるといふ、最も安全な方法からだつた。

三つの肉彈は北川伍長を先頭に一つの破壊筒となつて、驀進又驀進、雨とそゞ敵の猛射のなかを猛虎の如く突き進んだ。

だが、敵前に至り、北川伍長は小銃彈にやられて、バツタリ倒れ二勇士も同時につまづき倒れた。「しまつた」と思つたら忽ち三人は起き上り、將に爆破しようとする破壊筒を抱いて直に猛然と鐵條網に突進した。

「あつ。」

と思はず、叫ぶ瞬間。

ドカーン……。

轟然たる大爆音が、天地をゆるがして響きわたつた。

同時に、大きな肉塊が、火焰と共に、八、九メートル天空に舞ひ上つたかと思ふ間もなく落下して來たのが、はつきりと眺められた。

勇士の肉彈は、爆薬とともに、華と散つて舞ひ上つたのである。

このあまりにも悲壯慘絶な三烈士の爆死の光景と、馬田軍曹の鬼神の如き手榴彈投下の爆裂におびえきつて、怖れおのゝいた近くの敵勢は、

「わあーつ」と悲鳴をあげて逃げ出した。

かくて尊き犠牲のもとに、遂に、突撃路の一條は完全に開拓されたのであつた。

— 忠烈爆彈三勇士 —



横山桐郎

東京の人
農學博士
昭和七年歿
(年三十九)

忠臣藏
假名手本忠臣藏
淨瑠璃の佳作
竹田出雲等の作

八 蟲出づる頃

横山桐郎

寒い風が温く、暖い日光が強くと、自然に春の野外劇の準備が忙しくなる。

春空に囀る雲雀の歌と、日向の草土手に氣兼ねらしく咲くサギゴケやイヌノフグリの花にすがりついてゐる小蛇の合唱に、野外劇の幕は開かれる。

それは年々同じ藝題を繰返すのだが、昔から今日まで忠臣藏が少しも廢らないやうに、幾度繰返されても、少しも興味が減ることなく、いつも湧くやうな人氣である。

無論その規模、演出の技巧、將又綿密さに於て、自然の野外

劇は人間のそれとは比較にならぬ程優れてゐる、何時何處から生まれ出たかと思はれる、白地に黒い紋付の翅を持つた中形の蝶々が、さも楽しげにヒラ〜と、或は大根の花を求め、或は蜜を求め、或は鬼ごつこをして花の間を飛び廻つてゐる。野外劇の序幕は、この白蝶の舞踊に始まると言つてよからう。

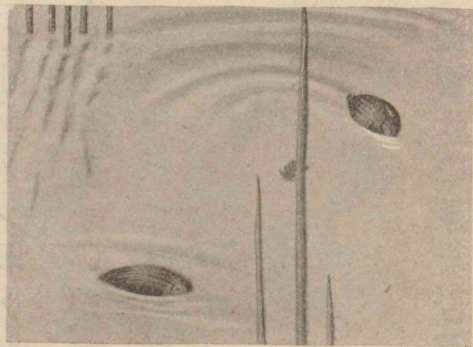
しかし白蝶は蝶の中でも、最も平凡なもので、その幼蟲の青蟲は、吾々の栽培する十字科植物の油菜・大根等の葉を食ふ害虫であるが、春のおとづれを告げる第一の使者として、私はこの蝶に敬意を拂ふものである。

冬の間は全く休業してゐた畔の小溝が、春の讃歌を合唱

し始めると、それに伴はれて蟲界の名ダンサー、水スマシは、眞先きに得意のダンスを舞ひ始める。

スイ〜と進み行く流の上、葦や杭の立ち並んだ間に妙技を振つて、散歩の人の眼をひき止める。小豆大の黒光のする身體の背には陽が白く、銀の豆のやうに光つて見える。

彼等は、流に逆らひながら、さも身輕に水の面をクル〜と渦を卷いて走る。そして人の足音や、一寸物音がすると、眼にも留らぬ速さで廻り始め更にひどく驚くと、ダンスをやめてあわて、水の中に潜つて行く。



シマス水

そして水底の木片や小石の下に潜り込んで、暫くちつと様子をうかゞひ、もう大丈夫と思ふと又ついと水面に出て、ダンスを續ける。その敏捷な妙技は蟲界第一である。水



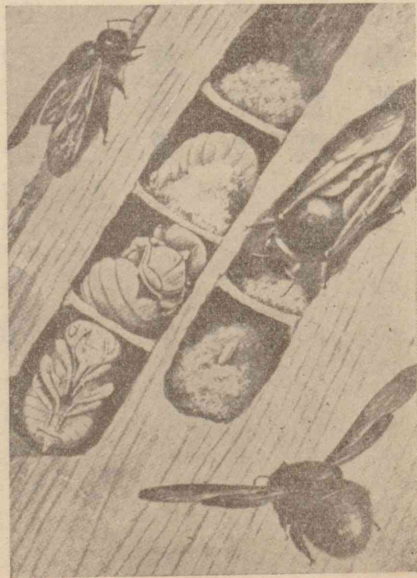
蛙の血生を吸ふメガタ

面を走ることでは、アメンボウも一廉のチャンには相違ないが、その技は水スマシに比べてはお話にならない。

尙、水の中には、へうきんな體つきをしたゲンゴロウ、山賊のやうな面構へに、大鎌みたいな二本の前脚を擴げて泳ぐタガメ、まるで棒切れの様な野暮な色と恰好をした水カマキリ等、何れも劣らぬ水中の追剥

辻強盗連が互に牙を鳴らして睨み合つてゐる。

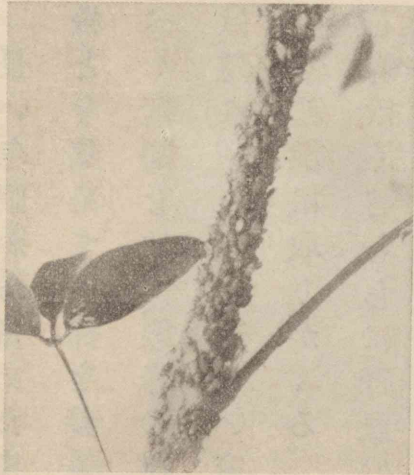
長い冬眠から覺めた蜜蜂は、朝早くから花を訪ね、蜜と花粉とを集めて子孫を養ふべく奮闘を始め、熊蜂の雌は隠れ家を出て新しい家庭の建設に取りかゝる。花蜂はくさむらに野鼠の巢を探して、おのが巢を營むべく活動を始め、大工蜂は枯杭に穴をほつて子供の養育室を建て、壁屋蜂は泥を含んでこれ又育兒室を造る。庭石の傍では小蟻がせつせと細い土塊をくはへ出して



杭道内の大工蜂

巢を造り始める。皆子孫のためにいそぐとして働いて
ゐる。

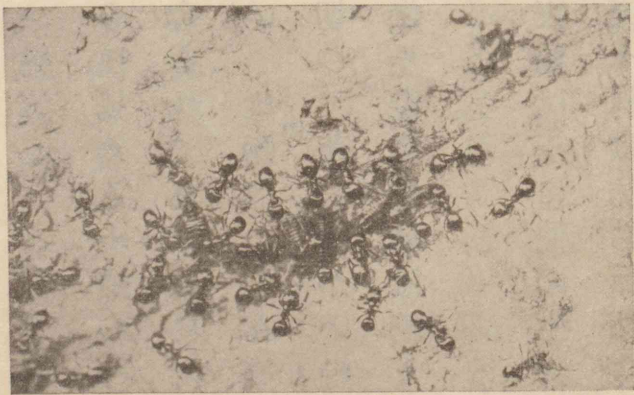
梅の若芽が伸び、桃の花が散つて青い芽が顔を出してし
ばらくすると、鮮かな緑が、いつしか灰色の網で包まれてし
まふことがある。見ると三分
程の水色のいやらしい毛蟲が、
うじやうじやと群つてゐる。
また裏庭に生えた露の葉が食
ひ荒されてゐることもある。
前者はオビカレハ、後者はゴマ
ダラヒトリといふ蛾の幼蟲の仕業である。



シムラプア

草花の莖にはアブラ蟲が盛んに子を産む。その間を黒
蟻が徘徊して、アブラ蟲から蜜を貰
ひその代償として無力のアブラ蟲
を保護する。さうした蟻の警戒の
裏をくゞつて、草カゲロフやヒラタ
アブの幼蟲は、またこのアブラ蟲を
食つて歩く。
春の樂園も、その裏をのぞいて見
ると恐ろしい生存競争の大悲劇の
舞臺である。

生きる者、死ぬ者、食ふ者、食はれる者、それらの者が各、生命



蟻るゐてつ貰を蜜らか蟲ラプア

を全うし、子孫の繁殖を計るべく奮闘努力する様は、蟲ながら實に敬服に値する。

路傍に庭園に蠢々として動く、無心に見える小蟻の一舉一動にも、深い思慮と大きな意味が含まれてをり、花に寄り添ふ胡蝶の舞も、單純な悦樂ではない。生物界の生存競争の大活劇は、先づ陽春三四月に幕を切つて落し、細かい蟲と蟲、蟲と植物との争闘に始り、やがて幾千幾萬の蟲は續々と舞臺に現れ、各得意の演技をなす。

その千態萬様、十人十色の妙技の表現は、正に他の生物界に見られない興味がある。蟲の研究、それは詰らぬ仕事のやうだが、その底に潜む教訓、深刻な調刺は、假名手本忠臣藏

以上に吾々の興味をそゝる。

私は多くの人が蟲にもう少し同情と理解とを持ち、蟲を研究する人達に、今少し尊敬を持つてほしいと思ふ。日本の昆蟲學は餘りに貧弱であり、昆蟲學者は餘りに輕視されてゐる。

— 蟲の世界を探ねて —

九 大根賣の話

柴田鳩翁

柴田鳩翁
京都の人
天保十年歿
(年五十七)

江戸の神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣歩いたが、どうしたとやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ

一文の錢もたまらず、これはつまらぬ、この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと忽ちあすは釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながらいつのまにやら兩國橋を渡り本所の屋敷町を、大根、大根、と賣り歩いた。

或御屋敷の表長屋の窓の内から「これ大根屋」と呼ぶ。「やれ嬉しや、まづ知行にありついた」と、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、御長屋へ廻つて見ると門から三軒目の高塀の内、門口には何某と標札が打つてある。荷を持ちこんで見れば、縁先の障子をあげ、且那殿が今、月代を剃られたと見えて、鏡立にむかつて自分の髪を結ひな



江戸時代の賣物風俗

から、「その大根はいくらぢや」といふ。「百に三把でございます」といへば、「それは高い。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつことなれば、どうぞ三把にお買ひなされて下さい。けさから江戸中を泣歩いて、まだ一把も賣れません。どうしても賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しません」といふ。かの御侍かぶりふり、「それでも高い。まからずば、まづよしにせう」と言ひ捨て、縁先の障子をはたと締められた。

大根屋もいろくといつて見ても、かの御侍が相手にならぬ。そこで仕様ももやうもなく、はてつまらぬ。もう日の入には間もなし。何でも四五百の錢を持つて歸らぬと、親子五人があすの命が繋がれぬ。何としたものであらう。」と、手を組んで思案をしながら、縁先の銅盃カケライにふつと目がついた。こゝが大事の關所ぢや。心の關所が油斷なく番してゐたら、銅盃に目はつかぬ筈ぢや。子の曰はく、君子固いとより窮す。小人窮すればこゝに濫す。」と。小人は困窮の時のぞんで無理に困窮せまじともがくゆゑ、終に悪心が起つて、ふと銅盃に目がつくやうになる。こゝを指して、小人窮すればこゝに濫す。」と孔子は仰せられたのぢや。

そこで、かの大根賣は、縁先の障子はしめてある、あたりに見る人はなし。かの銅盃を水の入つた儘で、大根二三把の下へそつと隠す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が、立ちどころに狭うなつて、五尺の身體を暫くも置くことがならぬ。

そこで荷を擔ぎ出して、門口を出ようとする、障子の内から「これ大根屋。」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で、まかりません。」といふと、「いや、直はねぎるまい。その大根買はう。」といひさま、障子をさらりとあけられた。大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、「何把程いります。はした賣はできません。」といふ、「いや、はしたでは

買はぬ。その大根皆買はう。この縁先へ並べてくれ。といはれる。さあ大根屋も一生懸命。障子の締つてあるうちなら、銅盥の出しやうもあらうに、今更銅盥が出されもせず、というて、賣るまいともいはれず。逃げて行かりにも、荷を捨て、歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろ／＼としてゐると、かの御侍が、大根屋の顔をきつと見て、われはきつうろたへてゐるぞよ。まづ銅盥から出して、大根の數を數へて見よ。といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ふたれるかと、わなわな震へながら、かの銅盥を耻づかしさうにそつと出して、土に手をつき、且那樣、眞平御免なされて下されませ。何を隠

しませう。先刻も申しまする通り、けさからまだ一文の商もいたしませず、このまゝ歸りますると、あす親子五人が食べますことがなりません。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助けなされて下さりませ。と、色青ざめて、土にあたまをすりつけて詫言をする。かの御侍、思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見えず、いや／＼、その詫言には及ばぬ。まづ大根の數を讀んで見よ。といはれる。こは／＼ながら、大根を縁へ積上げたところが二十三把。かの御侍やがて七百六十四文の錢を取出し、さあ、その方がいふ通り、二十三把、七百六十四文、序に銅盥を添へて遣す。貧のぬす

みとはいひながら、われが根性はよほど汚れてあると見える。この銅盥は、顔や手足を洗ふ道具なれど、たゞ顔・手足を洗ふばかりではあるまい。心の洗ひやうもありさうなものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。と言捨て、障子を締めて内へはいる。

さてこの大根賣もこれから本心になつて、夜晝働き、遂に三年目には相應な八百屋になつたといふこととであります。

—鳩翁道話—



泣菫は號
岡山縣の人
詩人

一〇 時計

薄 田 泣 菫

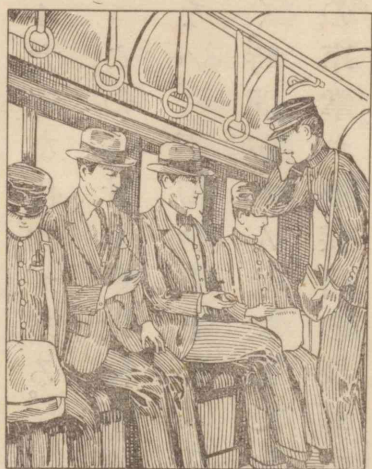
小説家のS氏は文學者に似合はない立派な時計をもつ

てゐる。英國のベネット製の懷中時計で、側はニツゲルだが、機械のいゝ時間の正しい事にかけては一寸類がない。S氏自身の言葉によると、日本にたつた四つしか無いといふ大切な代物である。

この時計がS氏に不都合だといつて、腹を立て、はいけない。不都合だといふのは値段が高いからいふのではなく、時間がそんなに正しいのをいふのである。S氏が汽車の車掌か、測候所の技師であるならば兎も角も、小説家であつてみると、ちよいと時間の遅れる時計を持つてゐた方が、萬事につけて都合がよささうなものだ。

そのS氏があるとき友達と一緒に電車に乗つた事があ

つた。車が日比谷まで来ると、車掌は乗換切符に剪刀ハサミを入れようとして、自分の腕時計を見た。すると安物の腕時計は、いつのまにか両手をひろげてとまつてゐた。



「これはいかん、時計が止まつてゐる。車掌は眩ウツきながら車中のお客を見まはした。「どなたか時間を教へていただけないでせうか。」

「時間か。」S氏は帯の間から自慢の懐中時計を引張り出した。S氏の考では、成るべくならば日本にある時計といふ時計を、自分の持つてゐるベネット製の上等時計に合はせておきたかつたのだから、それ

にはこんな恰好な機會はなかつた。「ちやうど十二時に五分前だよ。」有難うございます。車掌は禮を言ひ、針を直さうとすると、S氏と同じやうにポケットから時計を取り出して時間を見てゐた批評家の友人は横つちよから口を出した。

「をかしいな、僕のは十二時に五分過ぎだぜ。」

「へえ、十二時に五分過ぎ。車掌はどつちに従つたものかと一寸途方に迷つたらしかつたが、ひよいとS氏のニッケル側と友人の金側とが目に入ると、初めて判断がついたやうに金側時計の持主の方に向き直つた。

「あなた、十二時に五分過ぎだと仰有いましたね。有難う

御座いました。」

車掌は安心して腕時計の針を十二時五分過ぎに直した。「あれだから困る。世間のわからずやといふ者は、機械を見ないで、ぢきに外側だけで、善い悪いを判断するものだから。」

S氏は獨り語を言ひながらにやりと笑つた。

S氏に告げる。世間はまあそんなものでもしか世間の人達が、S氏の時計が日本に四つしか無い事を知つて、皆が皆立停つて時間を聞いたら、S氏もつくづく好い時計を持つた事を後悔するに相違なからう。

茶話抄



白鳥省吾
宮城縣の人
詩人

一一 開墾小屋

白鳥省吾

草生ひ茂る高原の

ところどころに落葉松、

その極まるところに遠い山脈。

高原の路は人のけはひもなく、

路傍にある大きい山梨の木の下に

荷馬車や人の休んだあとも

なつかしく寂しい。

高原には人間の匂ひがない。

ふと麥畑の麥の穂が風にそよいでゐるのを見た私は、
いつたい誰が耕作するだらうと思つたが、
やがて四五軒の家があつた。
二里の間に家といふのはそれだけ。

あゝそれらの人の耕す地面は、
この高原にとつて巨人の一つの足跡に過ぎない。
しかし人間はこの土を征服しようとする、
人と人との協力はその寂しさをも征服しようとする、
家の前には鶏も遊んでゐる、
子供も遊んでゐる。

雪解けのころになると、
きまつて一つ二つの人骨が出るといふことだが……
旅人も行き暮れる銀色の雪のなかに埋れて、
幽かにたちのぼる人家の煙よ。

私があゝの高原を通つたのは八月であつたが、
空には雲雀が啼き、
鶯が落葉松に啼き交はしてゐた。
いま佗しい冬の日
遠くあゝの高原の人々を思ひ浮べる。



八波則吉

福岡縣の人
第五高等學校教
授

ニュートン

英國の數學者
萬有引力の發見
者

(西紀一六四二—一七二七)

一二 不斷の努力

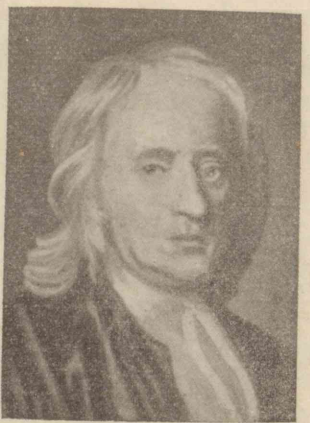
八波則吉

世には創造を偶然の産物であると解する人もあります。或人がニュートンに發明の祕訣を尋ねましたら「たゞ不斷の努力である」と答へたさうです。林檎の落下を見て偶然引力の理を悟つたと傳へられてゐるニュートンの言として「不斷の努力」といふ語は特に味ふべきではありませんか。ダーウインは英國の科學者で、進化論を首唱して世界の學界に著大な寄與よもぎをなした人でありますが、嘗て「科學の人としての余の成功は科學に對する愛情の賜物である」と言ひました。如何なる問題に就いても之を省察する際彼の

ダーウイン
英國の博物學者
進化論の首唱者
(西紀一八〇九—一八八二)

科學に對する愛

強い愛の力と、彼の無限の忍耐力が無くてどうして解決が出来ませう。故に私は創造の本源は「不斷の努力」であり、又「愛の力」であると斷言します。

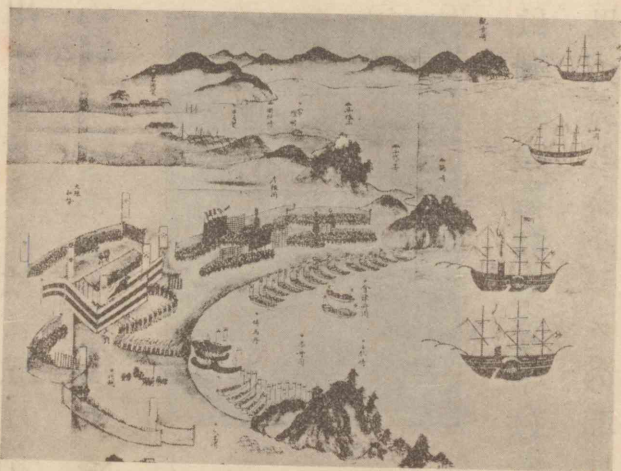


ユニークト

我が國が日本の日本から、東洋の日本となり、更に進んで世界の日本となつて、五大國の一に列するに至つた今日の文化は、抑誰の力でせう。問はずして知る。上は列聖の御稜威と、下は我等の祖先先輩者の苦心經營の結果であります。その間には定めし血の出るやうな苦しみもあつたでせう。例へばペルリが浦賀に來た時、我等の先

ペルリ
アメリカ合衆國
の水師提督
嘉永六年日本開
國使節として來
朝した

輩は方々の寺から半鐘を借り集めて之を海岸に並べて日



ルベリ久里濱上陸の圖

んか。「問ふは當座の恥、知らぬは末代の恥」と覺つた我等の

本にも大砲がこの通りにござ
るぞと見せかけたさうです。
船の上から望遠鏡で覗いた外
人には、計略の底が見え透いて、
嗚や噴飯の極であつたてせう
が、この一些事でも、負け嫌ひな
日本人の氣性と、無い袖を無理
に振つた先輩の苦衷クサイウがありあ
りと察せられるではありませ

先輩は、爾後事毎に外國人に師事して、一哩の鐵道を敷くに
も、一枚の葉書にスタンプを捺すにも、皆外國人に教はりま
した。船といふ船の船長は悉く傭外國人ヨウゴクジンでした。

それがどうです。今は數ある商船に唯の一人も傭外國
人の船長は居ません。一千餘噸の潜水艦も、四萬餘噸の戦
闘艦も、我等日本人の手一つて之を建造することが出来る
やうになりました。從來留學生と稱してゐたのが今では
在外研究生とその名を改めることになりました。一事が
萬事です。目下世界の一角で排日の名の下に我が同胞が
排斥されてゐますが、排日が實は恐日ヤウニチであると知る時、我々
の肩幅は却て是が爲にその廣さを増すの心地がします。

我が國の地位を斯くまで高くし、我々の肩幅を斯くまで廣くしてくれたのは、我等の祖先と先輩、少くとも我等壯年者までの力であつて、諸君自身は、今日までの文化には未だ何等の寄與貢獻をなしてゐないのであります。而も人生の目的は+Aであります。諸君は將來果して如何なるAを我が國の文化の上に+しようとするのでありますか。

大器は晩成します。諸君の天才的天性に加ふるに、此處大器は晩成します三箇年乃至六箇年の學生時代に於ける教育及び經驗の堆積に依つて、十二分に諸君の個性を擴充して、他日振天動地の大發明・大發見・大創作を爲すの素地を作られるであります。その基は日々たゆまざる不斷の努力でなくて何で

せう。

—要義と創作—

一三 鬼作左

新井白石



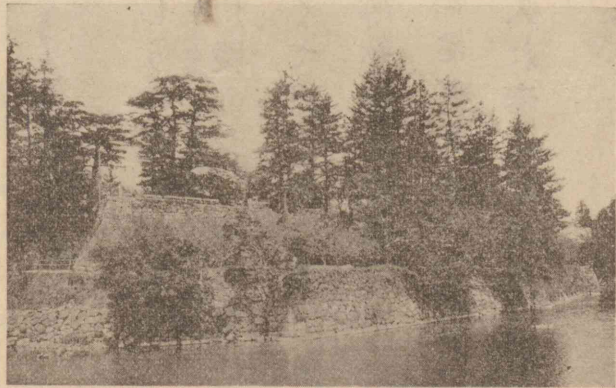
石

名は君美
徳川幕府の儒官
享保十年歿(年
六十九)
鬼作左
本多重次のこと
徳川氏の世臣
文祿五年歿

關白殿、いかにもして徳川殿と親しうならんと色々に謀を廻らし、やがてまたその妹君を徳川殿の北の方に參らせられしかば、徳川殿の上は見參なくてはかなふまじとて、御上洛ゴジョウラクあるべきに極まる。「御家人等が危く思はん所も侍る故、御逗留トウリウあらんほどはそれに留めさせ給ふべし。」とて大政所を下し給ひしかば、岡崎の城に入れ參らせ重次これを守る。

この時、重次下知して、大政所のおはしますほとりに、薪を

積むこと山の如し。こはそもいかなる事ぞと驚き、大政所の御供なる女房達下はした女下して、薪を積む下部男一人招き、酒など飲ませ、能く心を取りて、さて何事にかこの程、日々にかく薪をば積むは。と問へば、いかなる事とも、いかで下郎は知りまうさん。但し、承る所は關白殿の我が國の殿を失ひ給ふか、若しくは留め參らせて返し給はずば、今度都より御下りあつてこれにまします御方を、盡く焼き殺しまうさん料の薪とかや申して、本



岡崎城天守址

井伊殿
直政のこと
大久保殿
忠世のこと

多殿の下知として、日々に山林より伐りて來り候が、この本多殿と申すは極めて氣の短き人にて、殿の御歸り遅しくと待ちかねて、今朝火を附けう、焼き立てうとせらるゝを、井伊殿や、大久保殿が、暫しくと制し給へばこそ、今まではかくて候へ。いたはしや、美しき都上つじがうの、今の中にも灰土にならせ給はんことよと、下郎どもはまうすことにて候。といへるを、女房達にかくと告ぐれば、あな悲しや、その本多といふ男が日々に參りて、恐ろしげなる聲音にて家康よりこゝに附けまゐらせて候。御用の事あらば承りなんぞといふを、今思ひ合すれば、三河守殿の、はじめて御まゐりありし時、仙千代丸といふ兒の御供したるを、殿下の御覽じて、あれは

三河守殿
徳川家康

家康が家にて、三奉行とかいふ中の鬼作左衛門といふ者の
子ぞと仰せありしかば、おそろし、おそろし、鬼も子を生むに
や、鬼の子はいかなる者にかとて、物越しに人々見たりしに、



本多重次

その親の鬼ならば、さこそあら
め、さればこそこれへ参る度毎
に、家康歸り候はんとことは、
まだ御沙汰もきこえ候はぬに
やと、一昨日もいひしぞ、今朝も、
昨日もいひしぞ。待遠にや思
ふらん。あはれ、家康とく返させ給へかし。と歎きくどきて、
この由を大政所へまうしければ、大いに驚き給ひて、日々に

御消息ありて、徳川殿をとく返させ給へ。こなたの有様の
いふせさ、いつの世にかは忘るべき。など、ありし事ども、細々
とおほせ遣はされけるほどに、程なく御歸國ましまし、大政
所歸りのほらせ給ひければ、女房達涙を流し、情なくも、御母
上を下し給ひしものかな。鬼作左が、かくこそいひけれ、と
こそ計らうて候ひけれ。今は朝日の姫君を参らせ給へば、
徳川殿の御爲にも、大政所は御母上にて候を、いかに鬼なれ
ばとて、己が主のこと知らぬことや候べき。それにかく辛
き目見せ参らせて侍れば、はやく徳川殿に仰せられて、い
かなる罪にもあはせて、大政所の御恨をも晴らさせ給へ、と、
とりどりに訴へければ、關白殿は笑はせ給ひて、家康はよき

者ども、あまた召し使ひけり。秀吉もそのごとき家人をば欲しきことに候ぞや。とばかり宣ひて、御座を立たせ給ひきとなり。

—藩翰譜—

一四 雨の趣味

黒田 鵬 心

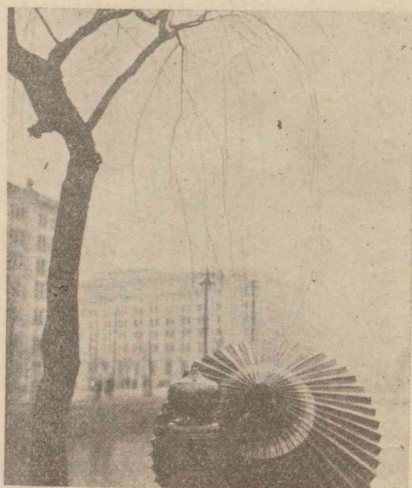
東京の人
名は朋信
美術批評家

黒田鵬



雨にはいろいろの種類がある。しとくと降る春雨もあれば、盆を覆すやうな夏の夕立もあり、淋しい秋の雨もあれば、寒い風を伴ふ冬の雨もあり、又鬱陶しい五月雨もある。さうして、その種類に従つてそれと違つた趣味を持つて居る。柳の若芽に煙るやうな春雨の長閑けさには、優しい女の趣があり、乾ききつた河原の石をも轉ばすばかり勢込

んで降る夕立には、強い男の趣がある。併し、何れにしても雨は單獨には餘り趣のないもので、何か背景又は添物を得て始めて趣を生ずる。例へば、春雨ならば、柳の木があつて、



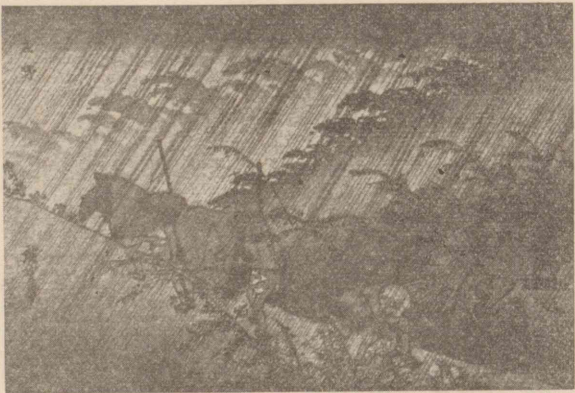
春 雨

其處を蛇の目の傘をさした人が通るとか、夏の夕立ならば向うに山があつて、手前に川があり、河原に急ぐ男が用意の蓑と笠とを取出して走るとか、五月雨ならば、それが瑞々しい青葉に降注ぐとかいふやうに、柳・傘・山・川・蓑・青葉などの背景や添物があつて、こゝに始めて雨の趣味が發揮されるのである。

雨の趣味は動の趣味である。新緑などは全然静の趣味であり、花も落花の場合を除けば静の趣味であるが、雨はいくら静かに降つても動の趣味である。随つて時間的の趣味を持つて居る。花や新緑は一目見ればすぐその趣味が味はれるが、雨は少くとも數分間續けて見なければその趣味を味ふことは出来ぬ。夕立のやうな短時間の雨でもやはりさうである。まして春雨・五月雨・秋雨などに至つては猶更のこととて、數時間も降りつゞいて居る中に、おのづとその趣味が味はれるのである。

雨はもとくゝ水滴であるから、花や青葉のやうに明瞭な形や色を持たぬ。その代りに、花や青葉の持たない所の音

を持つて居る。花や青葉も風によつて多少の音を出す、それは寧ろ風の趣味で、花や青葉その物の趣味ではない。



(筆重廣藤安)

夕落花も落葉も詩に歌ふほど音のあ
立るものでない。之に反して雨は天
空から降つて來て必ず地上の何物
かに當つて可なり高い音を立てる。
そして、その音が雨の趣味の少から
ぬ部分を占めて居るのである。春
夜部屋の中にて、しとくゝと降る
雨の音を聞けば、少しも外を見ない
でも、十分に春雨の趣味を味ふことが出来る。

戸外に居る時は別として、室内に居る場合には、誰しも先づ軒又は庭の木の葉に當る雨の音によつて雨の降出したことを知り、その趣味を味ふものである。雨の程よい音を聞いて居ると何となく落着いて、一種言ふことの出来ない穩かな感情の起るもので、親しい友としんみり話す時などの情調に最もふさはしい。

雨の色は餘り趣味に關係しないが、雨によつて濕された色は甚だ趣味の深いものである。新緑なども雨に濡れると殊に光澤を増し、幹や枝も全く前と變つた佳い色となる。又石は雨に濡れて始めてその趣味を發揮するものである。随つて石燈籠や飛石は雨に濡れると非常に佳い色になる。

土は石ほどではないが、乾いた時よりは雨に濡れた時の方が餘程趣が深い。併し、此等は打水をしても同じやうになるから、殊更雨の趣味とは言へないが、雨に附隨した趣味としては主なものである。

—人生と趣味—

一五 国立公園

青木芳雄

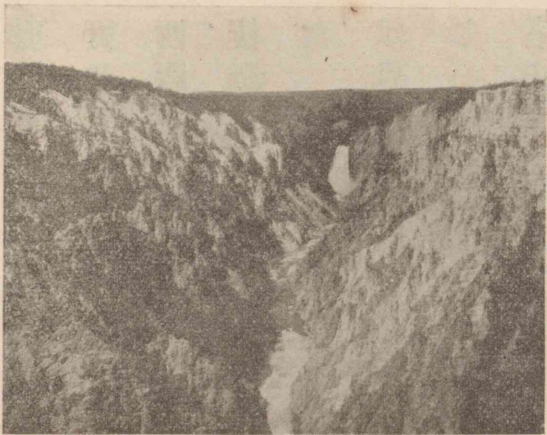
青木芳雄
長野縣の人
マスターオブ
アーツ
国立公園研究家
ワイオミング州
北米合衆國北部
にある

エローストーン国立公園は、アメリカ、ワイオミング州の西北、ロッキーマウンテン山脈中の火山地方にある。国立公園としては世界最初の創設にかゝり、また最大の面積を保有し、地域三千四百二十六平方哩に及んでゐる。やゝ長方形の地で、一帯の高原地帯をなしてをり、山嶺は三千メートルに達す

るものがある。

公園は一面優美で純樸な自然の趣と、他面變化に富んだ規模の大きい自然美の寶をもつてゐる。見わたせば、千山萬嶽の柔かいうねりは波の如く起伏して、雲煙模糊の間に出没し、また深山幽谷に分け入れれば、あたかも獨木舟が、きらめく水波を分けて押進むやうな氣がする。更に素絹を天空に織る飛瀑や、蒸氣の巨柱の高く天に騰る間歇泉が美しい虹をはらんでゐるのを見れば、自然の靈が躍るかとも思はれる。

急湍は巖頭に激して、白玉のしぶきを飛ばし、湖水は曇なき明鏡となつて、雲はのぞき、星は宿り、平和と靜寂がこれ



瀧大の園公ントスーロエ

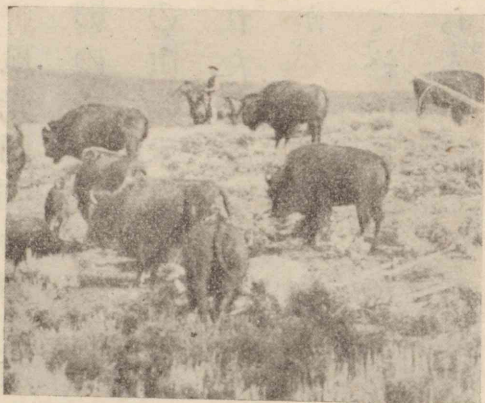
支配する。川は勇壯な山歌を吟じて、右に折れ左に曲がり、再び歸らぬ旅を急いで行く。巖の間から迸り出る泉は、或は冷えて鑛泉となり、或は熱して溫泉となつてゐる。

松で蔽はれた高原の間に、直下三百メートルの深溪をなしてゐるエローストーン大峡谷は、その岩壁全部を想像出来る限りのあらゆる畸形に蝕まれて、しかも濃紅から褐色、黒色から灰色、白色に至るまでの美しい縦縞や横縞が織交ぜられてゐる。

ビーバー
海狸
齧齒類の小動物

この公園の自然に更に一段の生彩色どりを與へるものは、野棲動物の群である。エローストーン公園は實に世界無比の野棲動物の天國であり、世界最大級の天然動物園である。西曆千八百九十四年以來、禁獵區域になつたので、美しい野棲動物は、ロッキーマウンテン大連嶺を擧つて、この樂園に集まつて來た。彼等は大自然の寵兒おぼこである。自然そのままの動物には恐怖のあらう筈はない。彼等は友情と溫和に満ちた楽しい世界に安んじて住んでゐる。彼等は我々山を愛する者の無二の友である。野棲の友は鹿か、麋もしかを初めとして、羚羊かじか、野羊、野牛、熊、狐及びビーバーである。なほアメリカの山に數限りなく棲んでゐる例の山犬と、

その外に豹と山猫とがある。鳥類では鴨、鷺、ペリカンなどが無數に群棲してゐる。



エローストーン公園の野生動物

熊のやうな動物でも、友情をもつて訓育すれば、ぢきに人に馴れて、人を襲撃するやうなことは、自衛上やむを得ない場合以外にはしないといはれてゐる。私の經驗からいつても、山犬や山猫や豹なども、人の臭におを嗅げば、こちらが氣のつく前に先

方で逃げうせてしまふのが常である。「エローストーンの將來における使命の最も大なるものは、

野棲動物の保護養成である。とアメリカ國立公園協會理事も力説してゐる。

風光明媚を誇る我が日本の山水山川の自然の風景の自然境に、野棲動物の影の少ないのは、まことに物足りない心地がする。昔はこの山紫水明の風物の間に、麗容美姿みづかきうつくしきの動物が多數見出されたものであつたらうに、今は實に物寂しい限りではないか。人類は動物の血を流し、美林彩花を或は倒し、或は焼いて、終に地上を無味乾燥の沙漠と化せしめていゝものであらうか。この意味において、我が國にも國立公園が創設され、自然の大風景地の保護開發が行はれる日の一日も早く來る事を願ふものである。

山嶽雄大の景觀に接して、人に

は剛健高邁の思想が湧き、溫和純眞な野棲動物の生活を觀て、同情愛と親和の情操が養成されるのは必然であらう。

—アメリカの國立公園による—

一六 眞夏

北原白秋



名は隆吉
福岡縣の人
詩人

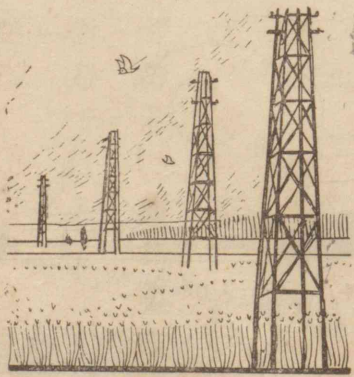
眞夏なり、

鐵塔のよき間隔

ちちと、ちちと、

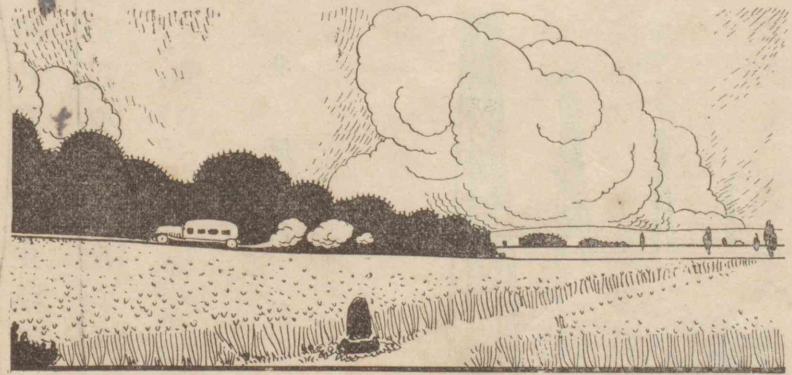
飛び撓む

鳥。



子らよ観よ、
噴き騰る雲、
青萱と、田の稻と
照り映る
空。

眞晝なり、
街道のバスの埃チリ
スロープのさ緑に
開く窓
あゝ、八月。



上田恭輔
満鐵社員

唐辛子カラシ
花咲きて、
ほのぼのと
人と家、
炎天の野に歪かみぬ。 | 週刊朝日 |

一七 旅順戦蹟秘話

上田恭輔

日露戦役後数年を経た時の出来事である。或時東支鐵道本部の副總裁一行が多数の幕僚を率ゐてはるゝ大連の満鐵本社を訪問されたことがあつた。



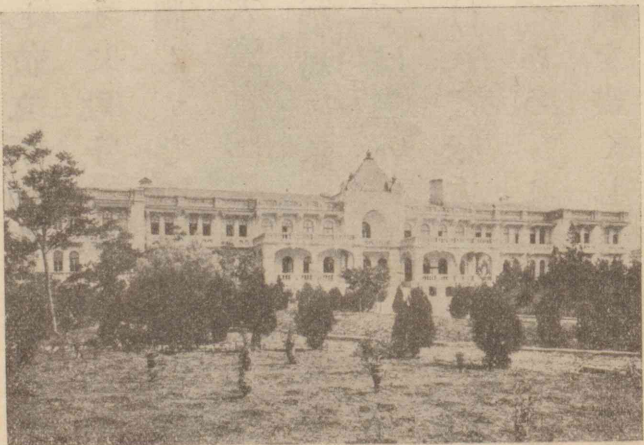
關東都督
今の關東廳長官

滿鐵としては容易ならぬ客として、出来る限りの歡待をしたことは無論である。接伴順序の終に至つて一行は旅順には關東都督がをられるのに、無斷で歸つては濟まぬから、一應かの地に出向して都督に敬意を表したいと言ひ出した。頗る道理あることであるから、早速その旨を旅順に傳達して、都督の都合を伺ふと、それは困る、何とかして來ない様にしてくれとのことであつた。當時の旅順は現在とは大違ひで、博物館も無ければ、大學もなく、遠來のお客に見すべきものは血腥き古戰場と、日本軍の武勇を物語る戦利品陳列所のみであつたから、都督の困られたのも無理はない。さりとして、露都から來た一行の公式の訪問を拒絶する

案子山
旅順新市街の北

口實もないので、私はほとく弱らされてしまつた。そこで夜分電話をかけて直接に都督に事情を具陳し、萬事を自分に一任して下されば、戦跡も見せず賓客の感情も害せず、にすますべき工夫を持つてゐる旨を具さに説明して、やつと承諾を得た。

さて翌朝臨時列車で一行を旅順に案内し、先づ役所に都督との會見をすませ、それから一行を、露軍陣歿者の爲に表忠碑を建立した案子山麓の露人墓地に



關東都督府

大案子山と小案子山とに分れ露人墓地は小案子山麓にある

案内した。

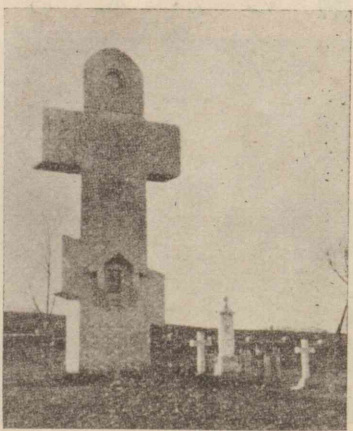
一行は馬車から降り、先づ脱帽し直立不動の姿勢をとつて忠魂碑に向つて最敬禮をなし、次に段上に登つて露文の碑銘を一讀した時は、一行の眼は潤んでをつた。碑の後方に廻つて、私が大島大將の撰文の大意を説明し、

「偶、互に敵となり味方となつて、戰場に鎬を削つても、これ皆祖國の爲であつて、個人の怨では無い。よつて一度戦地で隕命すれば、最早敵でも無ければ味方でもない何れも皆祖國に對する忠勇の烈士である。これが爲に、人道友愛の上から、必ずその遺骸は禮を盡くして鄭重に埋葬すべきである。況や露國と我が國とは既に國交復舊し

て友邦となつてゐる。是を以て、日本政府は旅順の軍憲に特命して、戦歿地點に假に埋葬してあつた露軍殉國の士の遺骸を搜索せしめ、禮を盡くしてこれを特に露人墓地の境内に改葬せしめた。」

と話して居る間にも、早、後方では嗚咽の聲が聞えた。

「露國の忠勇の士の英靈を長へ

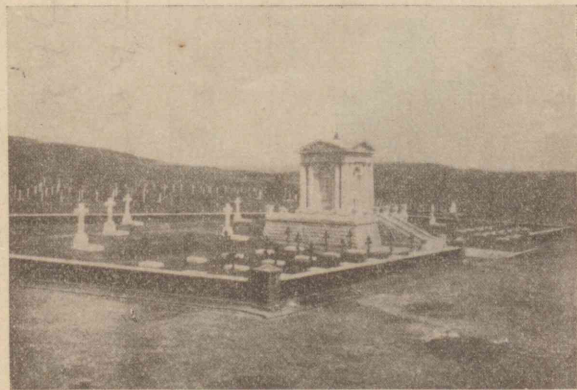


露人墓地の一部

に弔はんが爲、將また彼等の義烈を千載に傳へんが爲に茲にこの碑を建てる。」

と説明し終ると、一同は感極つて男泣にわつと泣きだした。時は正に滿洲の夏、焦げつく様な炎天にも拘はらず、一同

は再び帽子を冠らず、頭に強烈なる日射を受けながら、順次一々無名の士の墓に弔禮した。最後に禮拜堂のキリストの聖像の前に出ると、曾て除幕式の際に露國皇帝より記念碑に獻げられた美麗なる金屬製の花環と、乃木大將が手づから供へられた榊とがあつた。日本の國教である神道の典禮によれば、神を祭るには必ず榊を以てする。乃木大將は露軍の戦死者をすべて神として禮拜されたのであると説明したら、副總裁始め一同は床上に跪いて、黄



露軍陣歿者之忠魂碑

色に枯れた埃だらけの榊の枝に恭しく接吻した。其處から引返して都督官邸の午餐會ゴサンカイに臨んだ。食卓につくと、御馳走が出るに先だち、主賓は起ち上つて都督に向つて演説を始めた。

「宴會に於ける禮節を辨へず、且つは閣下並びに列席の諸公に對して甚だしく禮を失する事は百も承知して居るが、冀はくは特に寛大なる態度を以て、一言卑人の胸に溢れんとする切なる思を漏させて頂きたい。」と前提して、流るゝ涕を拭ひもあへず、聲を曇らし、言葉も切れぎれに、露軍戦歿者に對する日本國民の好意の籠つた行爲を感謝し世界古今の戦史に異例である美事を稱揚して、

ウラー
日本の萬歳といふにあたる



櫻井忠温
松山市の人
陸軍少將

二百三高地
旅順西北方の高地
海拔二百三米

熱血的大雄辯を振つた。これが爲に、都督を始めとして主人側は大いに面目を施したのみならず、あの時位に主客相共に胸襟を開いて意氣投合した會合はめつたに無いと思ふほどの盛宴となり、満堂はウラー、ウラーの喊聲で轟き渡つた。

—旅順戰蹟秘話—

一八 少年傳令使

櫻井忠温

何でも旅順攻圍戰の終に近い十二月の或寒い夕方であつた。二百三高地の谷間を、チヨロ〜と走つて居た一人の少年が、日本軍の砲彈に打たれてばつたりとたふれた。あたりの兵士は危険も顧みず、争つてその少年を救つて安

全の地に移した。

息もたえど、な少年の前には、ステッセル將軍が立つて、その勇武を激賞した。將軍がこの勇敢な少年兵士の血に塗れた光輝ある姿をみつめて、はらく〜と熱い涙を落したのは何故であつたらうか。

この少年兵の雙肩には頗る重大な任務が負はされてゐた。彼は將軍の爲には實にかけがへの無い祕密傳令使であつた。將軍は後、この少年を失つたことは、一隊の指揮官を失つたよりもなほ苦痛であつたと言つたさうである。

少年はステッセルの密書を懷にし、日本軍の攻圍線を潜つて、友軍との連絡を圖つたのである。彼は林檎のやうな

ステッセル將軍
ロシアの將軍
旅順の守將

赤い頬に土を塗り、苦力の着るやうな汚い青い支那服を着け、破れた帽子をかぶつて、蟻の這ひ出る隙もない日本軍の前哨線を大膽にも潜つたのである。晝は岩蔭に潜み、民家



クロバトキン
ロシアの將軍
日露戦争の時の
ロシア軍總司令
官

ク
バ
ロ
キ
ン

に隠れ、夜は出て匍ひ歩き、あらゆる艱難辛苦を嘗めて、クロバトキンの許に使したのである。幾度か日本兵の誰何をも受けたらう。幾度か日本軍の大部隊に遭遇して、膽を冷やしたこともあつたらう。荒野を渡る風の聲にも、枯葉を拂ふ雨の音にも、村落をさまよふ犬の叫びにも、幾たび耳をそばだてたことか。しかも愛國の赤

誠にもえる少年傳令使は首尾よくこの危険な、しかし光輝ある任務を果したのである。クロバトキン將軍は少年の頭を撫でながら、剛膽で機智に富む彼の行動を歎賞しつゝ、手づから勳章を授けて、その拔群の功績を全軍に布告したといふことである。

この少年は任務を終ると、直ちに踵を返して再び旅順に歸つた。そして出て、復還ること前後實に三回。日本軍の前哨線を出入すること六度。名譽の勳章を胸間に輝かすこと三度に及んだ。最後に二百三高地の谷地から、旅順新市街に入らうとするとき、つひに日本軍の砲弾に打たれて斃れたのである。

赤十字病院
國際的盟約によ
り戦時に於ける
傷病者を敵味方
の差別なく救護
する病院

老鐵山
南滿洲遼東半島
の南端に在る高
角

少年傳令使は旅順赤十字病院で落命した。彼の白いベ
ットのの上には、將軍から、兵士から、また市民から贈られた花
環が、堆く積まれてゐた。冷い枕の邊には、親もなく、兄弟も
なく、たゞ愛國の至情に燃えながら少年は獨り淋しく死ん
だのである。將士達はこの壯烈なる少年のために、誰一人
として涙をのまないものはなかつた。

平和回復の後、歐露から戦死者の墳墓を訪ねて、老鐵山の
麓に集まる順禮は非常に多かつた。近頃でもまだこの種
の順禮は少くないといふことである。予が旅順へ行つた
少し前の話である。これらの順禮の中に、十五六の花朧づ
かしい一人の少女が交つてゐた。どこの誰の塚を弔はう

とて、遙々數千里を旅して來たのか。

後で聞くと、その少女はあの勇ましい少年傳令使の妹で、
どこをどう尋ねても兄の墓らしいも
のが見當らないと、目を泣き腫らして
ゐたといふことである。

墳墓を訪ねて來たものは、三十九年
から四十年にかけて非常に多かつた
さうである。夫の墓を探しに來た妻
もあれば、兄の石碑を建てに來た妹も
あり、弟の墓を弔はうとして來た姉もあつた。みな老鐵山
の麓の埋葬地へ行つて搜索して居つたが、誰の墓はどのあ



旅順要塞圖

たりにあるといふやうな、旅順から歸つて來た兵卒の話を便りにして探すのであるから中々見當らない。けれども彼等は、凡そこれだと思ふのを寫眞に取り、それを國元にする兵卒に送つて問ひ合せ、その返事を待つてまた搜索するといふ風で、毎日五六里の道を馬車にも乗らず小さい子供の手を引いて、墓探しに行つたものさへある。彼等は決して富裕な者ばかりではない。中には實に見すほらしい風をした婦人もあつたが、皆何を措いても展墓のために、遙々一人旅をして來ることを厭はなかつたのである。いづこの國いつの世でも、變らず美しいものは祖國又は同胞に對する純粹な愛である。

— 銚 後 —

一九 まむしと百足の闘ひ

楽しい夏が近づきました。若人への特權である夏休みがあること、自由に海や山へ行けること、大自然の懷に心ゆくまではいつて行けることなどは、夏にだけ與へられる私達の楽しみです。山の頂を極め、山の背を傳ひ、或は幽谷の間を探る愉快さは何ものゝ比ぶべきものもありませんが、さうした登山の途中色々觀察すべき事柄のあることを忘れてはなりません。中でも最も面白いことの一つは、高山や深山地にすむ色々な動物の面白い習慣の觀察です。昔から色々な山奥の探險奇談が傳へられてゐますが、その中

には随分つくり話もあります。しかし私はこゝで、それこそ正直銘な實驗奇談のひとつを述べてみませう。

あの有名な黒部峡谷の奥を探検してゐた時の實地經驗談です。黒部峡谷といへば、少くとも山に興味を持つてゐる

者なら誰でも知つてゐる程、

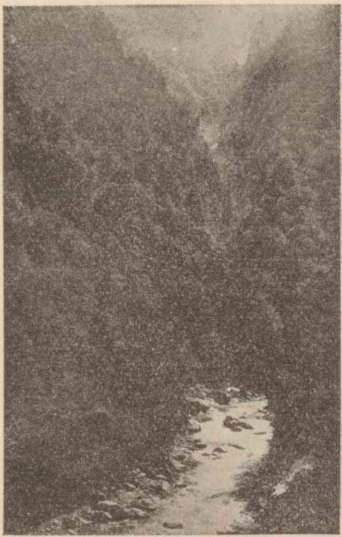
日本で代表的な峡谷です。

ついてゝすが、大まかにいへ

ば谷には溪谷と峡谷とがあ

ります。山に若い山と年と

つた山とがあるやうに、谷にもやはり幼年青年の谷と、壯年老年の谷とがあります。出來てから間もない谷にはその

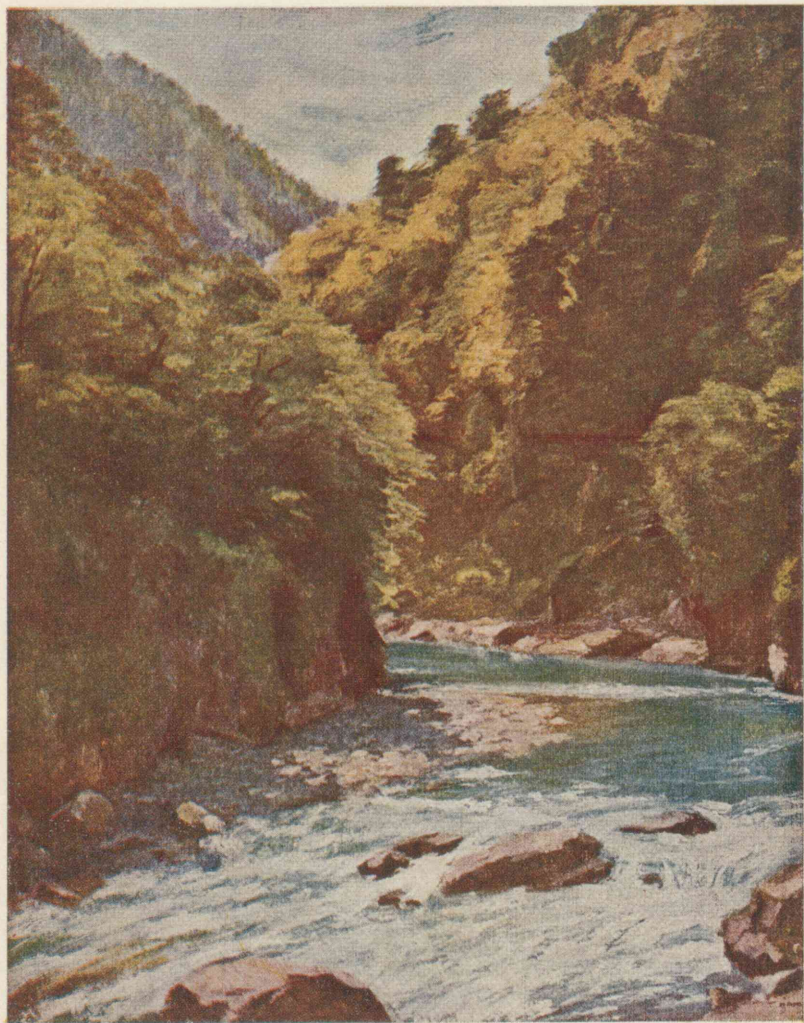


黒部峡谷

谷を造つてゐる兩側の傾が急で、丁度英字のV字形をしてゐるものがあります。そのV字形をしてゐる兩側が、年月のたつに従つて、雨や風のために段々けづり取られて行つて、傾がゆるくなり、V字形でなくなつて來たものを溪谷といひます。若いV字形の所謂峡谷の中には、谷の兩側が屏風を立てたやうにそゝり立つてゐるものがあります。黒部の谷はさうしたV字形の峡谷の代表的なものであります。山脈そのものとしてはもう壯年期にはいつてゐる北アルプスの鷲羽岳に源を發して、あの後立山及び立山の兩連峰の間を北へ向けて貫きはしつてゐるのがこの黒部峡谷です。特に谷の上流では數百米もある岩壁が文字通り

屏風のやうに突つ立つて、日本に數少ない峡谷の姿を表はしてゐること、谷の發源地並に上流が、今いつた北アルプス即ち高山的な色々の特色を備へてゐること等のために山岳に興味を持つた人々は、どうしてもこの黒部峡谷の探検をのがさないのです。うねくと天界を走る高い山の背の縦走にたまらない愉快さがあるのに匹敵して、かうした峡谷の探幽にも亦比ぶべきものゝない壯快さが味はれるのです。

話は思はず横道にはいりました。いや實は、横道ではなくて前置です。どうしてもこの説明をしてからでなくては今から話さうとするこの感じが出て來ません。



(筆郎太新下山)

近附釣鐘谷峡部黒

猿飛び
祖母谷の水が黒
部川に合する地
點
鐘釣温泉
黒部溪谷西鐘釣
山の麓
猿飛から下流約
十軒

だいぶ前のことでした。私はこの黒部の峡谷の雄大さを知らうとして段々奥深く谷を上つて行つてゐたのでした。勿論黒部峡谷を探るには、リュクサックをかついて、凡て登山仕度をして、日が暮れ、ばどこへでも野營するだけの覺悟を持つて行かねばならぬのです。あの猿飛びあたりまでなら、その日歸りて又鐘釣温泉などへ歸つて來て泊ることが出來ますが、それよりずつと奥、十字峽のあたりやその奥へ行かうとするには一歩々々がなか／＼困難で、それこそ數日かかりの用意で行かねばなりません。たゞ到るところに温泉が岩の間から湧き出てゐるといふのですから、野營する事は何處でも持つて來いです。私はかうし

たのんびりした氣持で峽谷の絶勝をめぐりながら、奥へくと岩壁をたどつてゐたのでした。

終日の歩行にさすが健脚の私もいくらか疲れを覺えたので、そこにあつた石くれの上にどかりと腰を下して奔流する峽水に眼をやりながらホッと一息したのでした。その眼がいつの間にか自分のゐる數間かなたの草むらの上に注がれました。瞬間、私はハッと驚いたのでした。どうでせう。そこには一匹の怖ろしいまむしがとぐるを巻き、首を鎌のやりに持ち上げてゐるではありませんか。さすが山になれた私も、この突然な光景にびつくりしたのは無理もありますまい。飛びつかれてもしたら、何んといつて

もひどい毒を持つてゐるまむしのことです。

ところが不思議ではありませんか。まむしはちつとも私の方へ飛んでこようとはしないのです。いや私がそこにあるといふことにさへ氣付かないらしいのです。それほど何かに夢中になつてゐるのです。變です。その持上げた鎌首は私の方へ向けられてゐるのでなく、何ものかを注視しながらぐるりとまはされるのです。それでそのうす氣味悪い眼のむけられてる方を注意して見ると、私は再びハッとさせられました。そこには長さ四五寸もあらうといふ一匹の百足が、そのまむしのまはりをぐるりぐるりと歩きまはつてゐるのでした。勿論、頭はたえずまむ

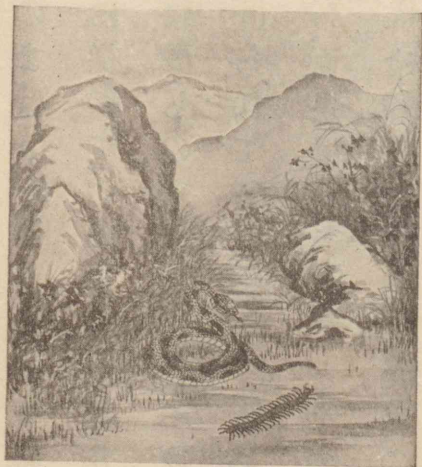
しに注意しながらです。私は始めて合點が行きました。それは世にもめづらしいまむしと百足の戦です。爬蟲類と節足類との闘争です。終日の歩行にやゝ疲れを覺えた私は、このめづらしい生存競争に、何もかも忘れて見いつたのです。

さて皆さん。まむしと百足の戦、果していづれが勝てせうか。大きなまむしと小さな百足。さういへば誰でも「そりや小さな百足の方が勝つんだらう。」といふに違ひありません。それならなぜ「小さな百足が大きなまむしに勝てるのか。」と問ひかへされると、これには皆さんグツとつまつてしまふでせう。多分百足が勝つんだらうとは考へても、

どういふ理由で勝つのか、そこが興味を中心點です。

そこで私はこの興味深い戦ひの解決を待つために悠々と腰をすゑて、その成行きを見ることに心をきめました。その間も絶えず百足はまむしのまはりをぐるぐるまはり續けてゐます。まむしはそれに従つて、これも持上げた鎌首をぐるぐる持廻らして、百足に少しのすきもあたへません。同じ状態がいつまでも續けられて行きます。まむしは鎌首をぐるぐるまはしながら、百足はザラザラとその足を動かしながら。其内だん／＼冷靜になつて來た私の頭には、いろ／＼なことが次々と考へられ觀察されて來ます。よく視てゐると、その百足はあの多くの足澤山ある所

から百足と言ひますが、實は十九對三十八本を一時に全部使つてゐるのでなく、幾本か宛を交互に使つてゐるので、丁度軍隊の行進でラッパ兵が交互にラッパを吹いて行くやうに、です。ですから足は代る／＼休むことが出来るので、疲れきつてしまふといふことはないのです。その上百足は遠まきにまむしの周りをまはつてゐるので、體の運動に大した無理が行きません。これに反しまむしの方では、下半身はとぐるを巻いて休ませてゐるものゝ、上半身は今言つたやうに所謂鎌首にして



持ち上げてゐるので、その重みに堪へるだけでもなかなかの努力です。その上、首をぐる／＼と不自然によぢらしまはしてゐるのです。

こんな不自然な状態で、どうしていつまでも疲れきらないてゐられませう。何とよい頭を持つてゐることか。昆虫類の百足は、生物進化の上からいへば、自分より遙かに高級の爬蟲類であるまむしよりも、立派な作戦計畫を立てゝゐるのです。百足は、はつきりした科學的な作戦のもとに持久戦をつゞけてゐるのです。全く科學的といつていゝのです。かうした持久戦をこのまゝにつゞけて行けば必然にくるべきものがくるに違ひないのですから。

この持久戦はどれほど續いたでせう。ほとんど三時間近くもつゞいたのです。とうとうゴールが來ました。さすがに堪へつゞけてゐたまむしも、結局疲れなひではゐられませんでした。首の回轉はいつの間にか亂れて來ました。ともすると倒れさうになる首を無理に持上げてはみますが、さうした努力がどこまで甲斐あることか。恐らくその眼光も百足に注視しつゞけることが出來なくなつて來たのです。それを待つてゐたのです。まむしに比べて殆ど疲れを覺えてゐない百足は、このとき、それこそ電光石火のやうな勢でうなだれかゝつたまむしの後頭部めがけて矢のやうに飛びついたのでした。そして鋭いその針を

いやつといふほどまむしの首へさし込んで激烈な毒を注射したのです。餘力のありあまつたその足といふ足をまむしの體にしがみつけながら。一たまりもありません。疲れきつたまむしは倒れるやうにその上半身を横たへました。力つき矢折れて立派に百足の前に征服されたのでした。

何んと面白いいろ／＼な教訓を與へてくれる戦でしたらう。私が氣付いてからの持久戦が三時間近いのです。それより前、この闘争が兩者の間に始められてから幾時間たつてゐたのか分りません。「科學的に必然な結果を見極めての悠々たる持久戦。」百足に果してさうした先見の明

があるのかどうかは別として、恐らくは彼等の本能的な行動の結果が偶然かうした科學的な理屈にあつたのでせうけれども、とにかく結果から見て、このやうな科學的な説明が出来るところに、何んともいへぬ面白味があるではありませんか。

—堀内又三郎の文による—

二〇 藤樹先生

橋 南 谿

橋 南谿
京都の人
文化二年歿
熊澤先生
名は伯繼
號は春山
儒者
元祿四年歿
藤樹先生
姓は中江
近江の人
儒者
慶安元年歿

熊澤先生は藤樹先生の門人なり。この人の藤樹先生に従はれし始を尋ぬるに、その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊る。馬方河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解

蘇

きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそ。と思へば、そのまま、榎木に走り行きて、飛脚の宿れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違なければ、その金を取出して返しけり。

飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、喜の餘り、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、若しこの二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず親兄弟までも重き罪を得ん。されば、その恩、なかく言葉の言ひ盡すべきにあらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉る。と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取



中江藤樹

納め給ふに、何の禮まづごとと言ふことあるべき。とて、手にだに取らず。色々にしらへ言へども、更に受けずして歸らんとする故、已むことを得ず、十兩と減じ、五兩となし、三兩となし、段々減じて、終には金二歩となし、
 「せめてこればかりは我が心の喜なれば受け給ふべし。さなくて
 は我が心も濟み申さず、今宵も寝ね難し。」と理を盡し、詞を盡して言ふにぞ、この金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。斯く返し申すからには、
 些いさかにてても謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして、餘あま

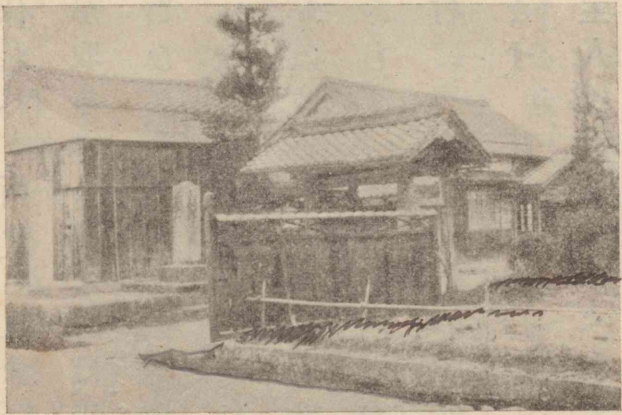
今宵

儀なく宣へば、さらば、鳥目二百文を賜はるべし、これは今夜休むべき所を、これまで追掛け來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば、申請しりやせうくべし。と言ひて、二百文にて酒を買ひて、その人に振舞あつくりひ、我も酔ふほど飲みて歸らんとす。
 飛脚も感に堪へ兼ね、さるにても、そこは如何なる人にておはする。と問ふに、名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に、小川村といふ處あり。この村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをなす。某も折節行きて聞き侍りしに、親には孝を盡すべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず、などといふこと、常に語り給ふに

より、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべき理なしと

心得しまでのことなり。」と言ひ捨て、歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命生き延びて、各方にも對面することゝなりぬ。とて、ありし次第を委しく語りけり。折節、その家の裏に、熊澤次郎八、田舎より上り居て、學問修業最中なりしが、この物語を聞きて、その人こそ眞の儒といふものなれ。とて、そ



院 書 樹 藤



大佛次郎

備前
備前岡山の藩主
池田光政

の翌日すぐに江州に至りて、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべき程の學徳なし。とて、更に隨從を許し給はず。熊澤只管に願ひて、二日が間藤樹の門に佇みて歸らず。藤樹の老母これを氣の毒が^仕り、^あとにかくに先づ内に入れ申せよ。とありし故、いなみ^い難くて内に入れ、終に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、藤樹を備前より招き給ひしに、その身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり、御役にも立つべきものなり。とて、熊澤を出されけり。

—東遊記—

二一 城明け渡しの日

大佛次郎

本名は野尻清彦
横濱市の人
小説家
城
赤穂城のこと
播磨國赤穂郡淺
野内匠頭長矩の
居城

すべての準備は終り、明け渡しの時と定めた明朝卯の時を待つばかりであつた。全藩の士卒は、住みなれた城の最後の夜を守るために、胸に満つる無限の感想をつゝんで、肅然とその持ち場についてゐる。この窓から見おろすと、かれ等が點々と城門の傍に屯してゐるさまも、廣場を横切つて行く姿も一々見えるのである。復讐の決議に加はつた者ばかりではない、心弱くして妻子のために又わがために前途の不安に怯えてゐた人達も、今日は何事も棄て、この城に集まつてゐた。城は、かれ等全體の家であつた。他國から歸る時、國境の峠から天守の白堊の壁を見て、やれく歸つて來た。との感じは、こゝにゐる誰の胸をも和らげた。

いざといふ時は、これによつて命を殞す筈の城だつた。

「最後の夜だ。否、最初の朝だ。」

内藏助は強くこれを信じてゐた。

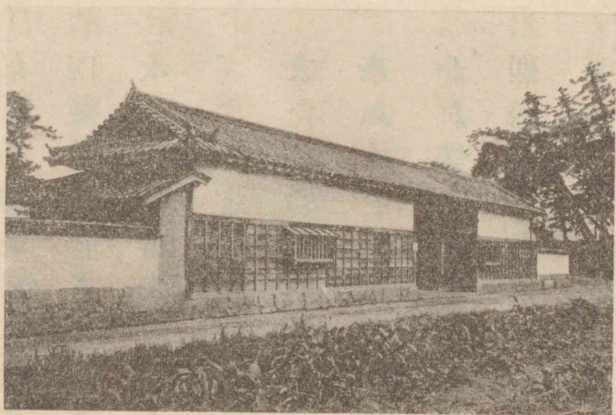
「永遠の月日の流の上に、おれ達はこの城に代る記念を建てようとしてゐる。この城よりもおれ達にふさはしい、またもつと堅固な家だ。風も雨も火も滅ぼすことの出來ぬまことの金城湯地だ。この城で迎へる最後の朝は、われ等の新しい門出の朝だ。」

烈しく、心にかう思ふのだつた。

しかも、なほ、ひとりこのやぐらに登つて見なれた山河のすがたを眺めた時、人には見せられぬ静かな涙が自らに胸

内藏助
大石良雄
赤穂四十七義士
の領袖
淺野氏の家老
元禄十六年二月
切腹

をうるませた。



大石良雄の家

引渡すばかりになつてゐて、さて誰も今日まで病氣の時の

「さらばぢや。」

内藏助は、壁をさぐりながらはしごを降りた。二の丸を廻る火の番の柝たたくの音が聞える。今夜は無論のこと、人々は徹夜することになつてゐた。

どの窓にも灯が點つてゐて、きちんとした侍達の姿が外から見えた。仕事は無論もう片付いて

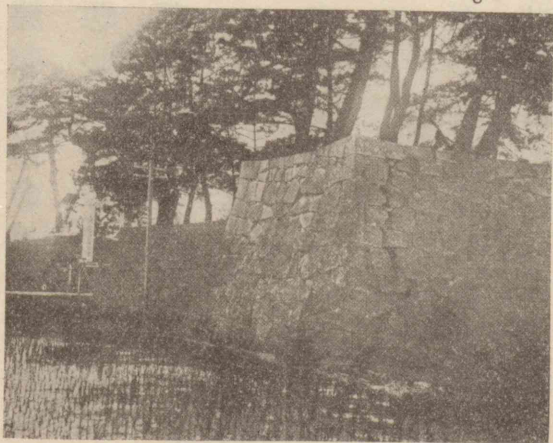
ほかは毎日出勤した事務を執つた場所や、机や、棚や、また廊下に、いざ離れるとなつて、はなれ難い愛着を感じてゐるやうに見えた。こゝは日あたりが悪いといつて他の部屋をほしがつてゐた人達も、自分達の部屋のつめたい畳の肌ざはりや、壁に描かれた汚染に、過ぎて行つた長い月日を感じて、自然と話を途切らせがちに、遠い部屋のしはぶきの聲に聞き入ることが多かつた。

やがて有明の月が東の空にあがつた。木立の向ふに城の壁の白い色が浮き上り、廣場の砂の上には松の影がゑがき出された。

人々がかはるゝ立つて、本丸の御座所に置いた御位牌みゐりはい

に最後の焼香をする頃になつて、夜は静かに明けはなれて来た。内藏助が御位牌を袱紗フクラシにつゝんでをさめてから、人は、蠟燭を消して外の光を導き入れた。庭の雀の囀ウツクりが聞えた。夜の名残りにまだ足もとの小暗い廊下を通つて、一同は外へ出て行つた。朝の庭は露にしめつて清らかであつた。

間もなく櫓の上でとうくと太鼓が鳴りはじめて、この静かな大氣を揺がした。豫定の時刻である。内藏助の命令で、前



赤穂城址

後の城門がさつとあけられた。

大手からは脇坂淡路守、搦手カサネテからは木下肥後守が各自の兵隊をひきゐて、緊張した様子で入城して来た。内藏助はこれを迎へ大書院に招じ入れて、改めて引渡しの内容を渡した。續いて、城の者は持場々々から撤退する。すぐに受城使達の兵士がこれにかはつて入城した。

城の者、いや、たつた今、城と別れることになつた人達は、静肅に川口門のあたりに集まつた。間もなく内藏助も出て来て、再び渡ることのない橋を一同揃つて、静々と渡りかけた。始めて、涙が湧き出して来ようとしてゐるのが感ぜられた。幾度も振返つて、城を見る者もあつた。藩祖が築か

れて以來五十七年、城は半面に光を受け、半面に濃い影を抱いて、明るく澄み渡つた朝空に、山の塊のやうにそびえて見えてゐた。内藏助はいまその城に愛着の眼を向けたのである。

濠端には、城下の人々が名残りを惜しんで並んで見送つてゐた。この聲のない人垣の間を、色も同じ袴カマエモノの波が肅々と流れて行つた。先頭に大石内藏助が、いつも見掛ける姿勢で、悠然とふとつた小柄な體を運んで行つた。

一同は一旦華岳寺へ引き揚げてから、そこで解散するこ
とになつてゐた。

華岳寺
赤穂にある淺野家の菩提寺

赤穂浪士

廣廣廣

湯淺常山

名は元祿
岡山の人
天明元年歿（年
七十四）



二二

諫言

湯淺常山

東照宮濱松におはしませし頃、ある夜本多正信御前にありしに、誰人にてかありけん懐より書を取り出し、諫め奉るべしとかねてより存ずる事の候て、書き候ものなり。」と申せば、大いによるこばせ給ひ、それ讀め。」と仰せありければ披きて讀みけるに、一條讀み終る度毎にうなづかせ給ひ「もつともなり。」と仰せられ、讀み終りければ、汝が志感ずるに詞なし。これより後も心置きなく告げよ。返すも神妙なり。」と繰り返し仰せければ、忝あつちがたきよし申して退出す。正信居残りて「唯今諫め申せし事、用ふべき事に候はず」と申す。東照宮

大いにけしきをかはらせ給ひ、いやとよ、己が過は知らずして過ぐるものなり。國を領し人を治むる身には、過を告げ知らせ諫むる者は鮮あまくて、唯ヒツラ詔ヒツラひて主君の言ふ事道にたがひても、さは候はじと詞を返す人は無きぞかし。諫をふせぎし人の國を失ひ身を亡し後世の笑ひ草となりしためし多し。唯今われを諫めし者、日頃心を盡し見及ぶ様につき諫めんと思ひて書きしるし、時もあらば見せんと思ひ居たりし志、何にたとへんやうなし。その用ふべきと用ふべからぬとにはよらざるなり。唯彼が忠心を愛するなり。とぞ仰せける。

又或夜の御物語に、凡そ主君を諫むる者の志、軍に先がけ

するよりも大いに越えまされり。その故は戦に臨みて一番に進み出づるはもとより身を捨てゝの事なれども、必ずしも討死せず。又討たれたりとても後の世に名を残し死後のほまれとなるぞかし。幸に功名をとぐれば恩賞にて家富み子孫榮ゆるなり。されば得あつて失なき忠なり。諫は然らず。主君不道にて善をにくむに、進み出でゝ直言する者、十に九つは刑罰にあひ、妻子をほろぼし果つる様になり行くぞかし。失あつて得なき忠なり。武功は名利の爲にもなるべし。諫言はいさゝかも身の爲を思ふ心あらば、いかで主君の前にて直言すべき。唯人に君たるものゝ賞すべきは諫臣なり。とぞ仰せありける。

常山紀談

二三 科學と空想

今は華やかな自然科学の作つた文明の時代である。この文明が、一朝一夕に成立したものでないことは誰しも知つてゐるであらう。すべてのことは、小さなことを一つ一つ究めて行つてはじめて完全なものになる。漠然とした空想が一瞬に實現するものではない。昔不完全な觀察から得られた空想を實現させるために、如何に澤山の人達が無駄骨を折つたかといふことについて述べてみよう。

その空想のうちで最も大きいものに、水銀や銅や鉛のやうな金屬も高價な黄金に變化させることが出来るかと考へ

たこと、また人間もある藥を飲むと不老不死になれると考へたこと等がある。この不老不死の藥を求め、又は黄金を作る方法を知るために、千年以上も如何に澤山の人々が苦しんだか。これをしらべて行くだけでも一つの面白い研究になるのであるが、今はたゞその間違の原因



鍊金術士

がどこにあつたかといふことを主にして話をして行く。この話によ

つて事實に立脚しない考が、自然科学の發達引いては吾々の幸福に、どれだけ良くない結果を與へたかがわかつてもらへれば結構である。

今の世の中で、煮たり焼いたりした位で鐵が金に變ると考へてゐる人はあるまい。實際、鐵は鑄びるやうなことがあつても、適當な方法ですぐ元の鐵に戻すことが出来るが、金や銀にすることは出来ない。鐵や金や又は銀は今日では勝手に變へることの出来ないものである。

ところが昔(今から二千五六百年前)ギリシヤに居た哲學者達が、非常に不完全な自然界の觀察を元として、簡單ではあるが間違つた説を樹てた。當時、又それ以後でも多くの人々が哲學者を尊敬する習慣があるので、その人達の説も深く信仰せられてゐた。

その説に色々な面白いものがある。一番有名なのはア

アリストートル
希臘の大哲學者
西紀前四世紀頃
の人



ルトートルスリア

リストートルの四元素説である。それに依ると萬物は火、空氣、水、土の四つから出來てゐて、火は熱くて乾いたものであり、空氣は熱くて濕つたもの、水は冷くて濕つたもの、土は冷くて乾いたものである。火はどちらかといふと乾いてゐるよりも熱いといふ性質が強く、空氣は熱いといふよりも濕つてゐるといふ性質が勝つて居る。また水は濕つてゐるよりも冷いといふ性質が強く、土は冷いといふよりも乾いたといふ性質が勝れてゐる。だから火に餘分の水を加へると、火の乾いたといふ性質が

打ち消されて熱くて濕つたもの即ち空氣が出来ると考へた。事實は別に空氣が出来たのでなくて、水が水蒸氣になつたに過ぎない。當時の人は空氣と水蒸氣との區別を知らなかつたのでこんなことを言つたのである。このやうに水でも土でも自由にその姿を變化させることが出来るものだと考へてゐた。

タールス

紀元前六世紀頃
の人

又同じギリシャの哲學者でタールスといふ人がゐた。

この人はまた思ひ切つて萬物は水だけで出来てゐると考へた。空中に突然雲が湧いて雨が降つたり、雪が降つたり或はそれに依つて植物が成長したり、魚が水の中で何も食はずに大きくなるのは皆水のおかげだと考へた。しかし

これも觀察が不十分であつた爲である。魚が何も食べぬ筈はない。しかし非常に精密な觀察を以てしても、このタールスの考を訂正出来ずに、反つてこれを支持した面白い話がある。それはこの考が出てから二千年も後のことである。

ヴァンヘルモン
ト白耳義の人
鍊金術者(西紀一五七二—一六
四)

十七世紀頃ヴァンヘルモントといふ人が植物は水ばかりで作られる事を實驗で證明した。それは五ポンドの柳の木を二百ポンドの土に植ゑた。それには絶えず水だけを注いでゐた。處が五年の後に柳の木は百七十ポンドになつたに反し、土は殆んど減つてゐなかつた。故に、柳の木にふえた百六十五ポンドは水から出来たものだと結論し

た。これだけの観察は十分であつたけれどもまだ今日から見れば足りない。即ち空氣中の炭酸瓦斯が日光等の作用に依つて植物を作るといふことを知らなかつた。それどころか炭酸瓦斯といふものさへ知らなかつた。空氣でも炭酸瓦斯でも水蒸氣でも一樣にこれを氣と呼んで互に區別する事を知らなかつた。この區別が出来るやうになつたのは、僅かこの三百年位のことにはすぎない。これは物の性質を區別することの出来ない、即ち観察が不十分なために外ならない。

以上の考は、たゞの考であるから世の中の人に何等迷惑もかけないやうに思ふ人もあるかも知れないけれども、實はさうでない。學者といふものが世間の人から殊更に尊敬せられてゐた昔にあつて、輕々しい觀察から間違つた考を發表したのであるから、この後何百年も多くの人々が無駄な努力をつゞけたのである。

萬物は、常に變化して色々の相になるものである、といふ哲學的考へが強く昔の人々の考へを支配してゐた。この考を元にしてゐるから、特に銅のやうなものに白い金屬亞鉛などを加へると、黄金色をした金屬(眞鍮)になることを知つた昔の人達は、今一步すゝむと黄金を作ることとは容易なことだと考へた。

そして、このことを成就させるための努力が、十八世紀中

ラヴァジエ
フランスの化學
者
(西紀一七四一—一七九
四)

頃まで續けられた。ラヴァジエといふフランスの學者が、今日の正しい考方を發見して、化學といふ學問を作り出す



エジッヴラ

やうになつて、はじめてギリ
シャ時代の哲學が、特にその
自然界の觀察が、正しくない
ものであることに氣がつい
たのである。

金を作ることは、どうして
もうまく行かぬことが分りきつてゐたが、その研究方法が
出鱈目であつたから、何故うまく行かないか、といふ理由を
見付けることさへ出來ずに益々混亂するばかりで、しまひ

にはこのことを利用して詐偽をはたらいて巨大な富を作
る人も出來て來た。

ある一派の人は、水銀と硫黄と土のやうな物から金が出
來るとさへ言ひ出した。しかし混ぜただけでは駄目で、そ
れにちよつとしたハナ藥を加へるとはじめて金になると
いふのである。このハナ藥が大したものので銘々秘密にし
て家傳以上のものにしてゐた。といふよりはそんなもの
は無いので、自分だけが持つてゐるやうに見せかけてゐた
のである。このために益々多くの人がこのハナ藥にあこ
がれて、このハナ藥を作る研究が盛になつた。その上この
ハナ藥にまたもつと大切な效能があると言ひ出された。

その理由はかうである。水銀と硫黄と土とを適當に混ぜてこのハナ薬を加へると、物の中でも一番完全な金になる。ところが人の體でいふと、土は肉體で水銀は精神、硫黄は靈に相當してゐる。この割合が狂ふと病氣になり遂には死ぬ。だから病人には水銀や硫黄を土など、適當に飲ませると癒るといふので色々の薬が作られた。そればかりでなく、例のハナ薬さへ飲ませると、人間は不老不死になるといふまるでなにかの御託宣ごたけのたまひみたいなことを信じて、どれだけ多くの人達が迷はされたか。しかし、いくら研究しても出来なかつた證據には今も人間は不老不死ではない。近代の科學を研究する人でこんな迷信みたいなことを

根據にして研究してゐる人はゐない。つまらなさを事柄も忽いにせず、忠實に觀察測定を行つてゐる。さうしてはじめて立派な科學が少しづつではあるが出来てくるのである。あまり華々しい空想や、はげしい慾望に迷はされて、昔の人々のした迷を再びくり返さないやう諸君は注意してほしいものである。

—泉俊夫の文による—

二四 秋風の音

若山 牧水

いちはやく秋風のねを宿すぞと長き葉めでてもろこしは植う

私はもろこしの葉が好きである。その實を取るのが望



牧水

歌人
名は繁
宮崎縣の人
昭和三年歿
(年四十四)

ならば、肥料は餘りやらぬ方がよい。しかし、見事な葉を見ようとならば、なるたけ多く施した方がよい。

書齋の窓に沿うた小さな畑に、私は毎年このもろこしを

筆蹟
より来りうすれ
て消ゆる水無月
の雲たえまなし
富士の山邊に
牧水

より来りうすれ
て消ゆる水無月の
雲たえまなし
富士の山邊に
牧水

筆水牧山若

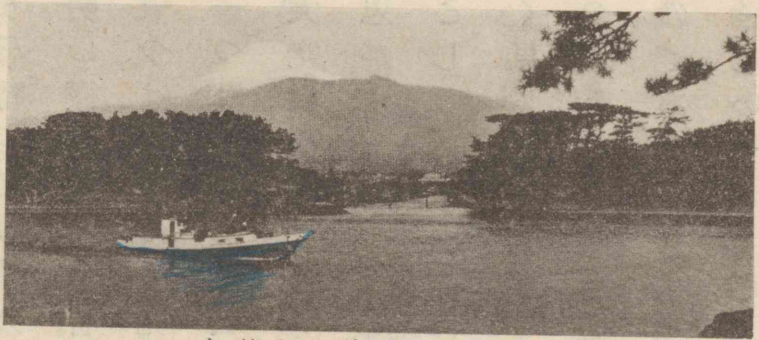
植ゑる。今年はそのあひ間あひ間にひまはりを植ゑて見た。兩方とも丈の高くなる植物で、一方はその葉が長く、一方はその花が大きい。

一年中さうではあるが、夏は別して私は朝が早い。大抵午前の三四時には窓をあけて椅子による。この頃だとも

う三時半には戸外が薄明るくなつてゐる。そのさやかな東明の微光の中に、伸びるだけ伸び盡したこの二つの植物が、一つは黒ずんで見えるまでの青い葉を長々と垂れて立ち、一つは今朝にも咲き出た様に鮮かな純黄色の大輪の花を大空に向けて咲いてゐるのを見ると、全く眼の覺める様な思がするのである。窓からさした電燈の光で見ると、もろこしの葉の兩側には點々として露の玉が宿つて居り、尙よく見ると、その葉の眞中所に、ちよこなんと一疋の青蛙が坐つてゐる。不思議にこの葉には、このお客様が來てゐるものである。

じいつとそれらに見入つてゐると、その畑の中からこほ

愛鷹の嶺
富士山の南麓
沼津市の北方に
ある
海拔一八七米



沼津よ愛鷹山を望む

ろぎの鳴く音が聞える。もうこの蟲
が鳴き出したかと思つてゐると、遠く
では馬追蟲の澄んだ聲も聞える。

夏の末、秋の初のかうした心持は、い
かにも静かだ、わびしいものである。

愛鷹の嶺にわく雲をあした見つ

ゆふべ見つ夏の終りと思ふ

明方の山の嶺に湧く眞白雲わび
しきかなやとびとびに湧く

— 樹木と其の葉 —



山田九郎
大分縣の人
國文學者
學習院教授
奥の細道
俳人松尾芭蕉の
奥羽地方紀行
種の濱
敦賀灣の西岸立
石岬の東南にあ
る
法花寺
日蓮宗の寺

二五 ますほの小貝

岩田九郎

奥の細道を讀むたびに、私のいつも心を惹かれるのは、種
の濱の風光である。「ますほの小貝拾はんと種の濱に舟を
走らす」としるし「濱はわづかなる海士の小家にて佗しき法
花寺あり。爰に茶を飲み酒をあたくめて夕ぐれのさびし
さ感に堪へたり」と書き、

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

と詠んでゐるのを讀むと、いろく想像がそれからそれへ
と擴がつて、その濱の景色が眼の前に浮んで来る——波打

際のわびしい寺、そのほとりに萩が咲き亂れて潮風に揺れてゐる。波頭が寄せてはかへすごとに、小さい紅いますほ貝がサラサラとかすかな音を立て、打上げられる。秋の日はかなしく海をそめて夕暮の風が帆の影を遠くに吹き送つてゆく――かう考へて來ると、私はもう矢も楯もたまらず早く行つて見たいと思ふ。

さうした夢が幾年かついた後、漸く一昨年去年の秋、その憧れの地にしみとくと濱の寂しさを味はふことが出來たの



種近附地地圖

一昨年
昭和五年

氣比の宮
氣比神宮
官幣大社
祭神は日本武尊
仲哀天皇外五座
色ヶ濱
種の濱のこと

であつた。それはもう萩の花も咲きそめた八月の末で、私は奥の細道の跡を尋ねて漸く敦賀の港に着き、氣比の宮のほとりに宿をもとめた夜のことであつた。すぐに宿の主人をよんで、色ヶ濱行のことを相談すると、其處に寄る便船は一日一回で、日歸りはむづかしいといふ。しかたが無いので一艘舟を仕立て、貫ふことにした。

翌日は清々しく晴れて初秋らしい氣が空に流れてゐた。港に行つて見ると天幕を張つたモーター船が用意をして待つてゐる。私はギーギーと櫓で漕いでゆく船を想像してゐたので、舟に乗りながら、櫓で漕いで行く船はないかと聞いて見た。船頭は委細かまはずモーターを動かして舟

を出しながら、この海は、朝は陸から沖の方へいつも風が吹くので、往きは樂だが還りは中々時間がかゝる、櫓舟でゆけば戻りは夜になつてしまふといふのである。その中防波堤の間を出ると、成る程陸地からはかなり強い風が吹いてゐる。「細道」に「追風時の間に吹き着きぬ」と書いてあるのもそゝろに思ひ出される。

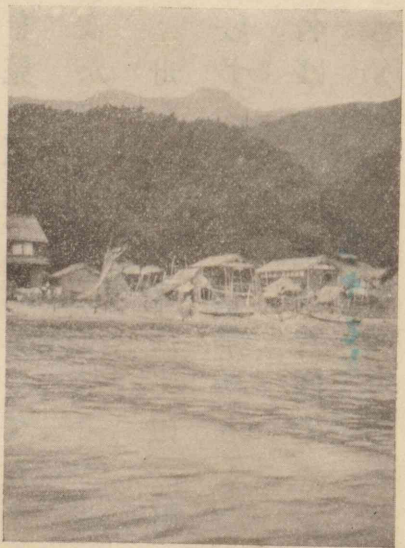
右手に近く金ヶ崎城址の森を望みながら、舟は快く水の上をすべつて行く。まもなく久しい憧れの地に着くのだと思ふと、私の心は少年らしいときめきをさへ覚えるのであつた。顧みると、敦賀の港は遠く波の間にかくれて海邊の松林が一抹の緑の線を描いてゐる。小崎・鷺崎を左に望

金ヶ崎城
延元元年新田義貞がこの城に據つて足利尊氏に抗した

み、手の浦の民家をそれかとも思つたが、舟はますます北へ進んで、敦賀を出て一時間餘も経つたと思ふ頃に、急に進路を左へ轉じた。小さい岬をめぐるるとすぐ近くに十四五戸の漁家の海邊に群がつてゐるのが眼に入つた。船頭は

「あれが色ヶ濱でございます。」

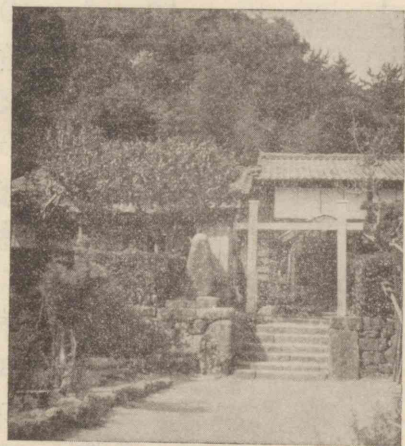
といひながら、舟をますます陸の方へと進めて行く。見た所みな小さい蟹の家ばかりで寺らしい建物もない。そのあたりにはひとりも人ら



種の濱

しい影も見えず、たゞわびしいひつそりした漁村である。私は想像してゐたところと餘り違つてゐない土地のさま

を見て、心から嬉しくてたまらなかつた。



(寺隆本) 寺花法

舟を上ると寺までは一町たらず、来て見ると寺といふのは名ばかりで、たゞ普通の民家にさゝやかな冠木門があるだけである。五六段の石階を上るとすぐ玄關で、上り口に近くそこに机を据ゑて八十餘りの老師が茶を飲んでゐた。私はその前に名刺を出して、はるゞ東京から訪ねて來た事

を話すと、

「それは、それは、お若いのによくまあ。」

と祖父が孫でも迎へるやうににこ〜しながら心から喜んで呉れた。そして火鉢を中にして坐ると老師は手づから濃い色の番茶を入れてすゝめる。私はすつかり自分の故郷にでも歸つた氣持になつて、いろ〜と遠慮なく芭蕉の事など尋ねて見た。

「ますほの小貝といふのは、今でもこの海邊にありますでせうか。」

「あゝ、ますほ貝ですか、それはありますよ、こゝから二三町行つた濱邊にな。ほれ、これがその貝です。」

Handwritten scribbles in blue ink at the bottom of the page.

といひながら老師は手文庫から紙包を出してひろげて見せた。時々人から聞かれるものと見えて、暇な時に採集しておいたものであらう。私は手にとつて見た、小さい貝だ。殻は紅色や黄色が、つたものが多く、透きとほる程に薄い。縦一分横二分位の可愛い、平たいものばかりで、萩の花がこぼれたら、かうした恰好になるだらうと思はれる様な貝である。「小貝にまじる萩の塵といふのは、この小さい貝の間に萩の花がこぼれて、それを波が洗つてゐる繊細な美しさを詠んだものであらうと想像せられた。」

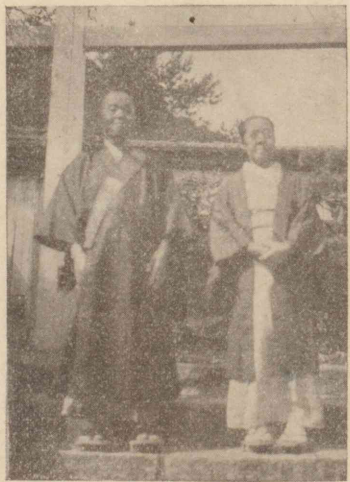
「この邊の波打際に萩が咲いてをりませうか。」

と、私はそれとなしに聞いて見ると、

「それがですよ、もとは波のかゝる所にも萩が澤山あつたのです。がな、この頃は海が少し遠くなつてめつきり少くなりましましたよ。それでもこの庭にもこの通り咲いてをりませうな。ドレ海岸を一寸御案内しませうかな。」

といひながら座を立つた。

私はだまつてその後についていつた。老師は頑丈な足どりて岩の上を越えたり、砂の上を歩いたりして波打際を辿つてゆく。私はそのところどころの岩かげに咲いてゐる萩の花を折つたり、砂の間にころがつてゐる小さな貝を



師 老

拾つたりして、芭蕉の頃の景色を心に思ひ浮べるのであつた。老師は時々立ちどまつては貝を拾つて、

「ほれこの白いのが梅貝、その紅いのがさくら貝ですよ。」
といつては私の掌に渡してくれる。想ふにこの海邊には、ますほ貝ばかりでなく、かうした小さい貝が澤山育つのであらう。餘り遠くなるので老師の身を氣遣つて寺に歸つてもらふことにした。

室に戻るとまた茶を入れてくれたり、かき餅を焼いてくれたりして老師は全く餘念がないやうである。その間にこゝから敦賀まで僅かに海上三里ばかりだのに、郵便が三日かゝることや、京都の人達が年に一度位この寺を訪ねて

来る事や、夏になると九十になる近在の姉が訪ねて来ることなどをほつとと話した。

暫らくして奥の方から、等栽の書いたといふ奉書紙大の幅物を持つて来て掛けて呉れた。これがあの細道に「その日のあらまし等栽に筆をとらせて寺に残す」とあるものだと思ふと、私は舊知の人に會つたやうな懐しさを覺えて、許しを請うてカメラに収めることにした。

やがてもはや別れの時が來た。懇ろにお禮をのべて起たうとすると、老師は、
「いゝお土産を上げませう。」

といひながら、日頃採集したますほ貝を始め、うめ貝・櫻貝・玉

等栽
福井の人
連歌師
伊人
芭蕉の友人

蟹等を、寺號の「本隆寺」と書いてくれた袋に入れた。そして自ら先きに立つて砂濱まで送つて來た。いよゝ舟が陸を離れてからも急に歸らうとはしなかつた。私は老師の姿が見えなくなるまで、いつまでもいつまでも見かへつてゐたのである。

ますほの小貝は、思ひ出の貝として、多くの標本と共に「奥の細道」と書いた私の小箱に今も大切に收めてある。

—國文學者一夕話—

帝國新國文 卷三終

帝國新國文 卷三

昭和七年十一月一日印刷
昭和八年八月五日訂正發行
昭和八年八月五日訂正發行

定價 金 六 拾 錢

編者 藤村 作

發行者 株式會社 帝國書院
東京市神田區四神田二丁目三番地

代表者 増田啓策

印刷者 高橋 郁

發行所 株式會社 帝國書院
東京市神田區四神田二丁目三番地

振替口座東京 1011

關西販賣所 大阪市東區橫堀四ノ三
三宅莊藏書店

振替口座大阪 六九

不許
複製



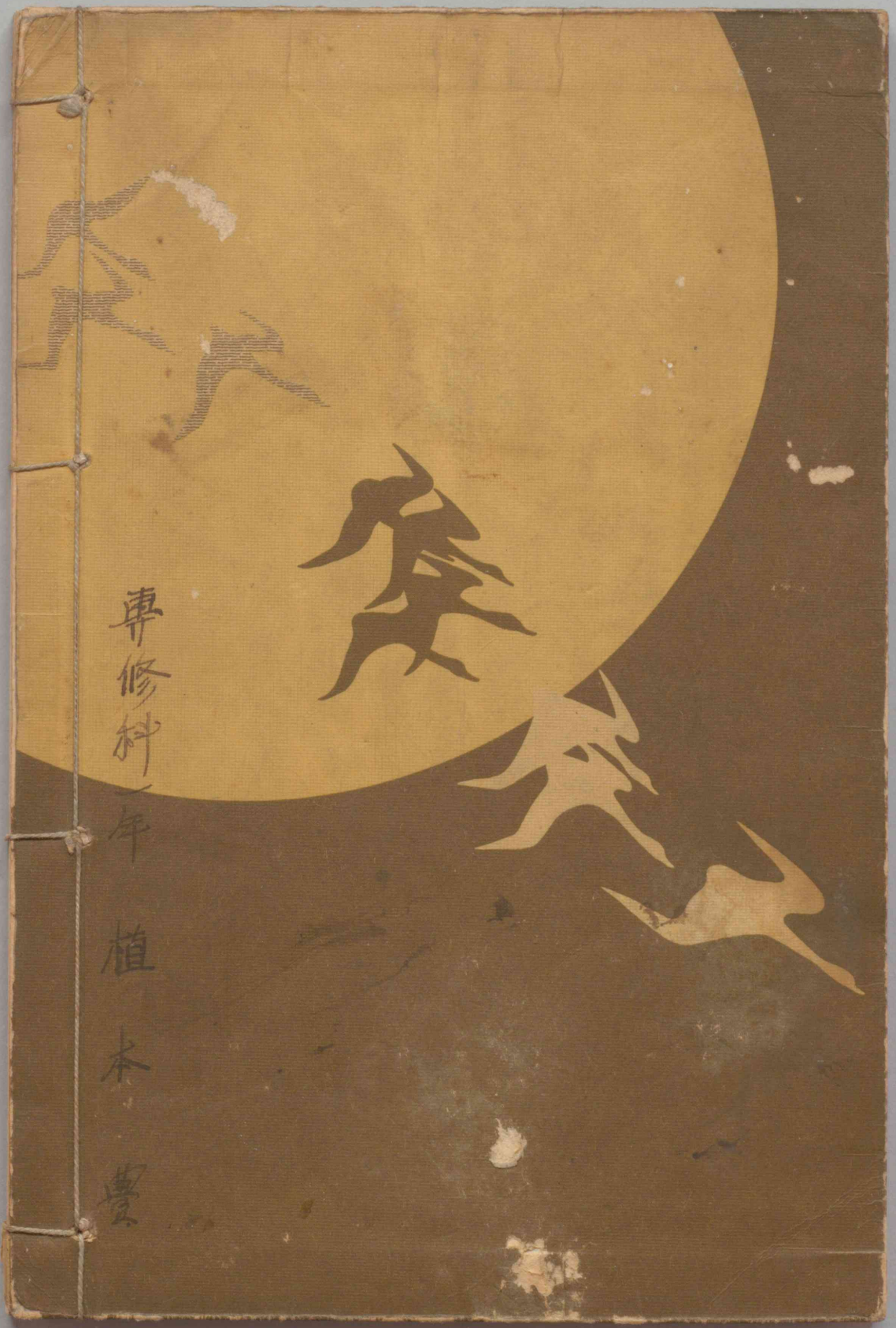
廣島縣立廣島工業學校

專修科一年

植本 曹

廣島縣立廣島工業學校

專修科一年



專修科
年植木
學